
THE UFO RESEARCHER

Sky People Association-west Japan
C P R -Japan

Kiyoshi Amamiya

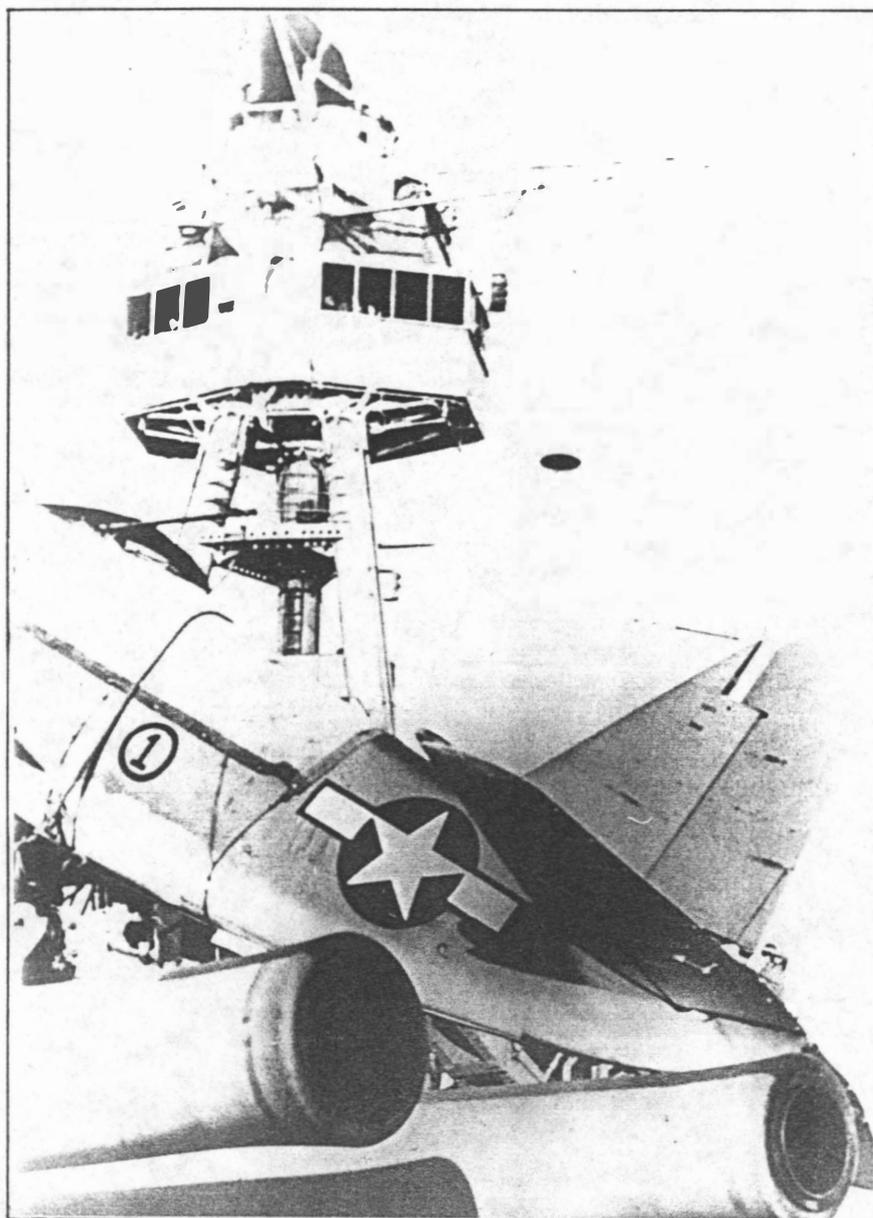
193-5, Byodobo-cho, Tenri-city

Nara-pref. 632-0077 JAPAN

E-mail : ad472@mahoroba.ne.jp

<http://www006.upp.so-net.ne.jp/masahirotsuda/ufoindex.htm>

VOL.15 NO.1 2003



Copyright by CBUFOTA - R.K.Lesniakiewicz.
Wszelkie prawa zastrzeżone - All rights reserved

Jordanów, 2002-10-25, g. 17:45 GMT

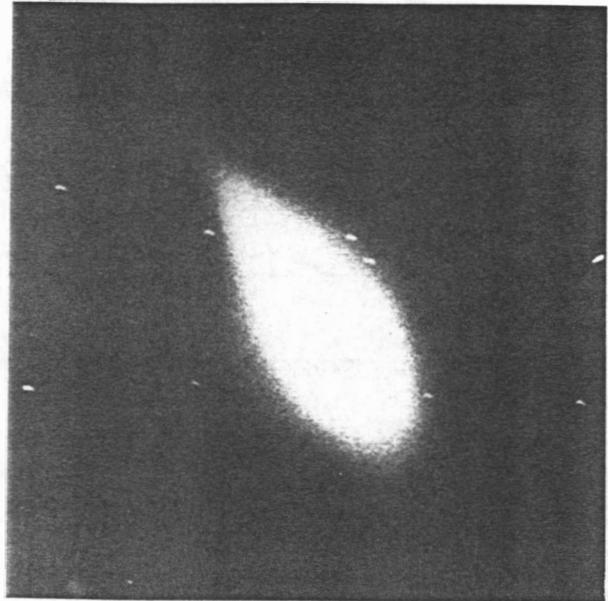
UFO?

Copyright by CBUFOTA - R.K.Lesniakiewicz.
Wszelkie prawa zastrzeżone - All rights reserved

THE UFO RESEARCHER

Magazine of SPACE & UFO FACTS

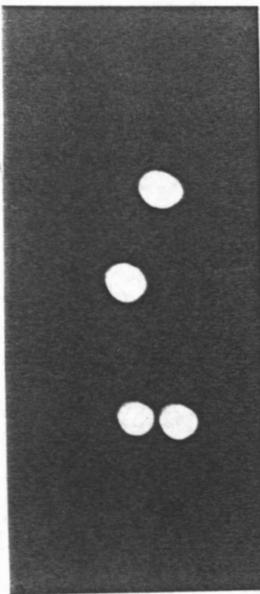
Editor: Kiyoshi Amamiya
Managing Editor: Yuki Amamiya
Associate Editor: Osamu Sato
Taira Fuji
Fumi Kohara
Mari Saito
Illust. Associate: Shima Amamiya
Photographic Asst.: Tatsuya Inui
Research Staff: Hirokazu Fuzihira
Circulation Dept. Masaya Komagamine



REPRESENTATIVES and CORRESPONDENTS
are located all over the World.

Exchange Partners: SKY PEOPLE ASSOCIATION

Japan Space Phenomena Society
Kazuno UFO Research Association
Takao Ikeda(MUFON's news National Director for Japan)
The UFO Criticism by J.N. from Japan
Tugio Kinoshita(Director of UFO Contact house)
Utopia Network



Robert K. Lesniakiewicz(Poland)
Malopolskie Centrum Badan UFO i Zjawisk Anomalnych(Poland)
JUDr.Jiri KULT(Czech)
Milan Dolezal(Czech)
Takashi Okamura(U.S.A)
Ph.D. Richard F. Haines(U.S.A)
C.P.R.international(U.S.A)
AFU(Sweden)
THE JOURNAL OF UFO RESEARCH(China)
UFOlogy Quarterly(Taiwan UFOLOGY ASSOCIATION)
HUNAN PROVINCIAL UFO RESEARCH SOCIETY(China)
Beijing UFO Research Society(China)
Cheng Bainian(China)
Wu Jia Lu (China)
UFOlogy Research Institute of ShanXi(China)

CONTENTS

■ Outbreak of UFO sightings across the United States! Even on the 50th anniversary of the Washington Incident...Will it spread across the world?... from The Washington Post.....	4
■ From Newscippings.....	11
■ Living proof of a famous UFO incident, Dr. Greer's efforts surface the advances and effects of the "Disclosure" project.....	12
■ The astronaut who disappeared in the cosmos?.....	15
■ Russian Black Circle UFO caught on tape?.....	22
■ Introduction to British Crop Circles of 2002.....	24
■ Japanese-Chinese UFO information exchange.....	27
■ UFO Sighting Report.....	29
■ The reemergence of ancient Jomon-era technology.....	32
■ The sudden passing of the Japanese UFO researcher Kousaka.....	34
■ Czech cropcircle photos.....	43
■ UFOs in religious art?.....	44

THE UFO RESEARCHER published by SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN, Printed in japan.

© 2003 SKY PEOPLE ASSOCIATION WEST JAPAN

全米にUFO目撃多発!!

ワシントン事件50周年のその日も…世界へ波及か
---ワシントン・ポストが伝えるUFO情報から---



Washington Post
(<http://www.washingtonpost.com>)

■ワシントンポストのホームページ

1952年7月のワシントンUFO事件から50年目に当たる2002年7月、米空軍戦闘機がUFOを追跡するという歴史の反復を思わせる事件を始め、米国各地そしてカナダ、ロシア、アルゼンチンにUFO目撃が相次いだ。ここに『ワシントンポスト』が報じた事件の全容を紹介する。

編者が米国シアトル在住の岡村堯氏と共にレーニア山を訪問し、帰国して間もなく、岡村氏より大量の英文情報がEメールで届いた。それは、米国東海岸で起ったF-16のUFO追尾事件に始まり、同じ時期に世界各地で起ったUFO目撃事件を伝える米国の大新聞『ワシントンポスト』の記事であった。

この頃、F-16戦闘機がしばしば低速で飛行する軽飛行機的首都圏侵入を追跡するという出来事があったため、この出来事の反映かと思われたが、問題のものは現象面では高速の飛行物体を含み、「流れ星」「光のフォーメーション」「ドームのある物体」「燃えるような6つの光」などの形容がみられるところから、軽飛行機の誤認とは考えにくい。

編者はこの事件の重要性から、本誌A.E.の神原二美氏に翻訳を依頼した。神原氏は多忙なため、翻訳の最終仕上がりを来年春と見込んだが、予定より早く翻訳が仕上がったので、確認しつつ毎日少しずつ文章を入力した。

冒頭「F-16、未確認航空機を追跡す」と題された一連の記事は、ワシントンポストのスタッフライター、ステイブ・ヴォーゲル氏によるものだが、本誌では、同紙サイトが報じた各々の事件を、各地域単位で日付順に並べ替え、日付の見出しの下に原文の見出しを置いた。またEDITOR'S NOTEとあるのは、記事ライターの補足である。

全世界はインターネットの普及により、情報の流通が迅速に行われている。「UFO」をキーワードに検索すれば、無数といっていいほどのUFO関係サイトに突き当たる。電子空間の中では、一般市民の情報が即座に流通する仕組みが出来上がり大新聞のサイトにまとめられる機会が増加したと云える。

この『ワシントンポスト』報道のように、米国では、UFO目撃市民→UFO目撃報告センター→報道ライター→テレビ放映・大手新聞サイトの流れが確立しつつあるようだ。

ここでは市民からのUFO目撃情報の多くが、NUFORCというUFO研究団体のホームページに寄せられているようで、情報源としてNUFORCを明記した目撃情報が多い。

また、いくつも紹介されているサイトにアクセスして、関係写真も入手できたので、その一部も合わせて紹介してみた。

■2002年6月22日

米国メリーランドでBWI空港上空のUFOsがビデオに撮られる

ボルチモアのビル・ピーン氏の報告…「2002年6月22日、ボルチモアのワシントン国際空港の観察区域で、私はバージニアMUFON調査員アレクサンダー・ズィカルとビルに会った。私は2台のキャムコーダー(编者註:ビデオカメラのことらしい)を、1台を北東に、もう1台を南にセットし録画を始めた。我々はそのに30分程いたが、そのときズィカル氏が何かを目にとらえた。それは北東の空にあって、我々のすぐ目の前である形を形成し始めた。それはまるで宇宙人のようで、我々は写真を撮り始め、同様にテープにも録画した。後で写真とテープを再調査したところ、数機の通常でない航空機が捉えられていた。ズィカス氏は銀色に反射する物体を捉え、私は同じか、もしくは類似のものを捉えていた。私の写真上では、その物体の上に暗いドームがあるのに気づいた。私のウェブ・サイトを見て下さい。神の祝福がありますように。」

この写真が見られるビル・ピーン氏のサイトは<http://www.ufoman104.com>である。ビル・ピーンに感謝。

Editor's Note:ビルは外に出て行っては、彼がそれとわかるUFOおよび「驚き」を探す。私は皆さんが空を広く見渡せる良い観測ポイントを見つけるようお勧めする。出かけるときは必ずカメラを持って、ドライブする時もそばに用意しておくことよいだらう。多くの人々は、彼らが準備を整える前に、家を出た直後にUFOを見ると報告している。UFOsは至るところで目撃されている。

■2002年6月29日～7月23日

ロシアのベルミ周辺で脈動するUFOとサーチライト照射UFOのビデオ撮影

ロシアUFOリサーチステーション(RUFORS)のディレクター、ニコライ・スポチンの報告によると、2002年7月23日「UFOハンティングのシーズンがベルミで始まった」という。4月のあの有名な目撃の後、古典的な銀の円

盤型UFOがウラル地方都市上空に観測された。

2002年6月29日午前12時10分ころ、UFOが百貨店アパートの7階からビデオに撮影された。ビデオを撮ったナクシム氏によると、第一印象は「明るい星かもしれない」というものだったようだ。しかし、まもなく彼はそれがあまりにも速く動いていることに気づき、録画しはじめた。

2002年7月2日には、UFOがもとの観測地点よりはるか南に目撃された。星、あるいは人工衛星にしてはあまりにも動きが速く、明るく脈動する卵形だった。そのビデオには、脈動して動く物体が、フラッシュする毎に急停止する様子が映っている。

2002年7月17日午前12時30分ころ、カマ川上空で何人かの目撃者が低い雲の中でフラッシュしながら川の上をゆっくりと移動する明るい光を見た。突然、光から2本のビームがまるでサーチライトのように射して、川とその近くの家々を走査しはじめた。この衝撃的な目撃は2分間続いた。それからビームは消えて光は去り始め、突然小さな点ほどに縮まって姿を消した。その物体はライトを発しながら急上昇したかのようなようだった。RUFORSのニコライに感謝。

■2002年7月1日～7月27日

カナダで葉巻型UFOと光の目撃

オンタリオ ハンツビル…2002年7月1日の午前1時30分ころ、私はコテージレストランに居た。我々はパチオ(編註:スペイン風の家の内庭)で飲み物を飲んでいて。ふっと見上げると流れ星と同じような速さの何かか飛んで行くのを見た。しかしそれは2つの丸いオレンジ色の物体で、西に向かって行った。サークル状に飛んでいたが、それから上方に向かい、雲を通過して違う方向へと別々に飛び去った。

テラス・ブリテッシュ・コロンビア…ブライアン・ヴァイクの報告によると、17才の科学志向のある青年が電話で「僕は地球外にも別の生命体があるはずだとずっと信じてはいたが、二晩前に人生を変えるような信じがたい物を見るまでは確証があったわけではなかった。2002年7月27日の午前12時25分ころ、プリンス・ルパートに向かって南西の空高くを飛行する光を見た。それが東にずっと高く近づいた時、ゆらめく明るいライトが側面を回る葉巻型かパンケーキのような形であることに気づき始めた。その動きがいかに不気味でなじみのないものであるか気付くまで、僕は完全に(UFOが実在すると)確信していたわけではなかったのだ。これは人間のテクノロジーではなく、僕が今まで見たどんなものとも異なっていた。2分後、それは水平から対角線のポジションに移ったが、ライトが側面(へり)を走る状態で、ゆっくりと動き続けた。歩いて帰宅途中、物体は北西に動き始め、高度が低くなり、木々が私の視界を遮った。それを見たのは、それが最後だった。」と話した。ブライアン・ヴァイクに感謝。

■2002年7月2日

ミズーリ貨物パイロットが急速に動く楕円形の物体を目撃

カンザス・シティー…私は主な航空会社で働いた経歴を持つ小さい双発の貨物航空機パイロットである。2002年7月2日、私はカンザスシティー国際空港から飛び立ったところ、途中で何らかの奇妙なものを見た。私は懐疑論者で、今までUFOなどというものは偽物だと思っていた。

私が見たのは楕円形の物体で、点滅灯も色のついたライトもなく、空の向こうへ東から西へ急速に移動して行った。私は以前に何千という人工衛星を見ているが、これは絶対に人工衛星などではなかったと確信している。なぜか?それはこの物体が私の機の前ガラスを横切る時、10セント硬貨ほどの大きさに見えたからだ。その物体を霧の中に見失う前に、私が最初にそれが現われたのを見てから、頭上に向かってから地平線よりわずかに上(だいたい腕を伸ばした親指の巾)に進んだ。

この物体は、この全距離をわずか3分以下で移動した。私の見積もりでは250～300マイル(編者註:移動した距離を推定したものか?)はあった。

それは物体全体を照らす柔らかな中間色の白っぽいシルエットの光を放っていた。その時、私は4,500フィートから上昇していた。その物体は50,000フィート以上にあったと推測される。私は衝突の恐れがあったかどうかを確かめるため、ATC(Air Traffic Control=航空管制)で問い合わせたが、すべての高度を含むレーダーには、「K.C(カンザスシティー)国際空港へ向かう少数の低高度のターゲット以外、何も飛んでいない」とのことだった。ATC管制官と私はちょっとの間、笑い合い、それ以外は何も言われなかった。あの物体を見て以来ずっと、毎日、それは私の心に残っている。

NUFORCディレクター、P.ダベンポートに感謝。

■2002年7月13日

米国ニュージャージーにおけるUFOの動き

パラマス(PARAMUS)… 2002年7月13日夜、ニュージャージー北部で3個の未確認飛行物体が飛び回り、脈動し、そして消え去った。午後11時10分、星のような2つのまばゆい光が現われ、北東方向へゆっくり移動しているのが見られた。空は晴れ渡って澄んでおり、見通しは良かった。2つの物体は空高くに現われ、とてもまばゆかった。少しの間、目撃された後、3つ目の少し暗く輝く物体が、はじめの2つの物体の後方、北西の空から現われ、それらの間を飛んだ。3つ目の物体もまた星のように見えた。この3つ目の物体は北へ方向を変え、完全に消え去ってしまった。フォーメーションを組んでいた物体も完全に薄れて見えなくなってしまった。すこし後、これらの白く輝く物体のうちの一つが、ひととき明るく脈動し、消え去った。そしてほんのちよつとあとで、3つ目の物体が明るく脈打ち、北へ向かい消えていった。はじめの2つは頭上に位置していたはずだが、再度目撃されることはなかった。目撃者の中には警官と二人の保安要員が含まれる。目撃者の一人はパイロット資格を持っていたが「見たのは通常の航空機のそれではなかった」と考えている。

--NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝。

■2002年7月15日

ロシア クリミア上空のUFO-ウクライナ・ニュース速報-

シンフェロポリ…「クリミア自治区首都のシンフェロポリ上空に(UFOの)目撃があったとの報告を受けた」とアントン・A・アンファロフがレポートした。

「私は2002年7月15日に前KGB巡査部長だった友人のピクトル・クルピンから興奮した電話をもらった。彼は『家の階から21時36分にUFOを目撃したばかりなんだ。赤く明るく輝いていて北東へ向かっていた』と云っていた。そ

れから彼は、赤く輝く物体が水平にジグザグに動いて、10秒後には木々のうしろへ消えたと云っていた。彼の息子は2001年11月にUFOを目撃していたが、彼は自分で見るまでそんな話はまともに受け取らずにいた。

クリミア…ピクトル・ソロフは2002年7月24日のおよそ午後9時ごろ、シンフェロポリのオールドセンター近くを犬と歩いている時、5つか6つの白い光が北東の空に直線状に並んでいるのに気付いた。はじめに彼は、それらが飛行機かと思ったが、音もなくライトの数や並び方が他のどの飛行機とも違うと思った。シンフェロポリへ着陸するアプローチ用灯火かとも思ったが、空港ははるか遠くだ。接近する間にライトが周期的に明滅し始めたが、それは飛行機のライトの周期と違っていた。6つのライトが毎秒ごとの間隔でフラッシュしていた。その物体の形は識別できなかったが、白いライトがその縁についていた様子から、それがディスク型の物体であることを示していた。

■2002年7月20日

米国ペンシルヴァニア・ライト

フォードシティ…2002年7月20日午後9時40分、3つのはっきりした赤いライトが梢の高さ(编者註:この表現は実際の高さではなく、見かけ上の位置と思われる。自分の場所から見る空の位置は、方位と“仰角angle”を用いるが、従来“角度”は“高度”という表現で記述された。原文の「at treetop level 梢のレベル」は「梢の角度」という意味でとらえたほうが実地的である。民間目撃は、この表現でしばしば誤解を生んでいる。空中にある物体の実際の高さとは、三角測量的に多数の地点からの仰角によってしか求められない。)に目撃された。私は私の妻、義理の母、義理の兄弟姉妹とともに3つの点滅していない赤い光が連なっているのを見た。左手の2つは3つ目のものより間近にあった。

物体は南西の空を右から左へ、並木の後ろをゆっくりと動きながら、現われたり消えたりしていた。我々の町には1000~2000フィートの丘がいくつかある。(物体が動いている間、2マイルほど先のその物体の上に光がフォーメーションを形作っていた。地元の行政執行官と電話する間、2機の単発機がとても高く飛行していくのに気付いたが、それらのエンジン音はハッキリと聞こえた。

—NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝する—

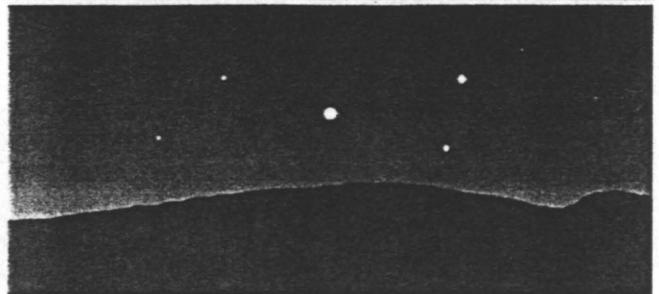
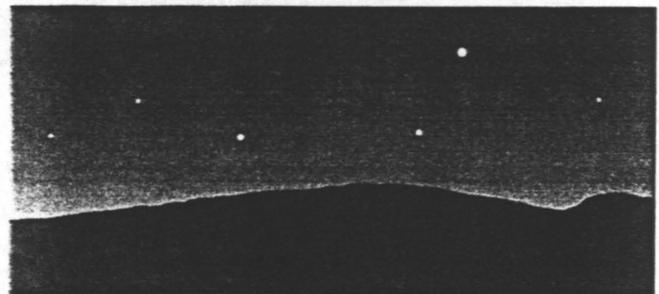
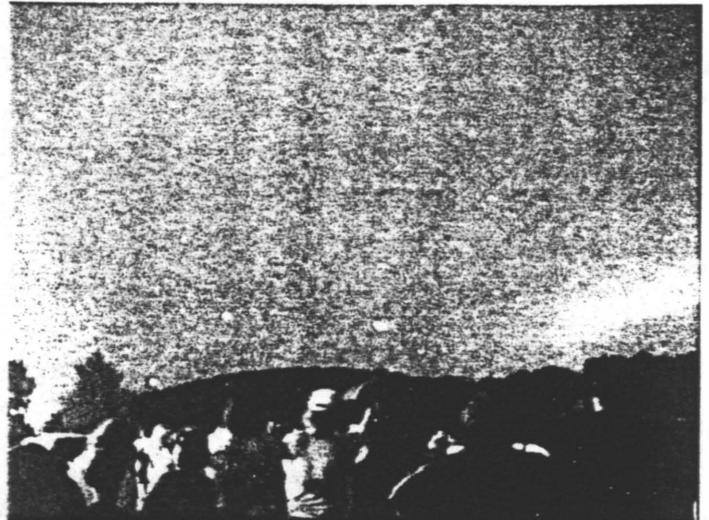
■2002年7月20日

米国ウィスコンシンUFO DAZEフェスティバル上空で
6つの光がフラッシュ

ダンディー…ケイシー・ホルトの記事によると「2002年7月20日、UFO DAZEフェスティバル(编者註:UFOの祭典行事の一つらしい。UFOWISCONSINのホームページから紹介した写真と図を参照されたい)にUFOが出現し、150人以上の人々が目撃した。私はそこに居合わせ、すべてを見て、光をビデオテープに録画した。ある理由で、私はここミネアポリスから出て行かねばならないと感じた。州の森林公園上空からそれらの光がやって来たのを見た時、初めは6つの光がすぐ近くに見え、オレンジ色のプラズマ・ボールかもしくはキャンプファイアーの色のような機体で、とても印象的だった。私はある種の炎で有り得るかと思った。それらの動きはむしろある力の誘導下にあるようだった。それからいくつかがストロボライトのように

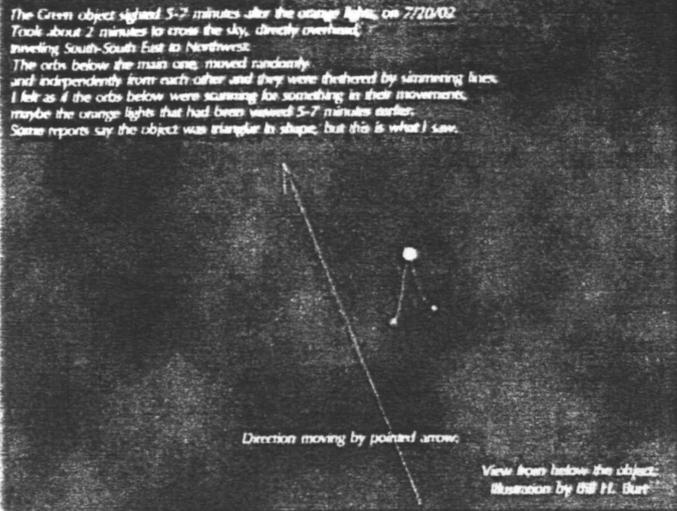


Home | Site Map | News | Events | Photo & Video Gallery | UFO Education
 Contact | FAQ | Links | Privacy Policy | Site Map | Sitemap | RSS Feeds
 Copyright © 2002 UFO Wisconsin. All Rights Reserved.



すごく明るく急速に光って、最終的に行ってしまったか、または見るには低くなりすぎたかのようなだった。私はこれら6つの光体を「プラズマ・シップ」と呼んだ。

それから数分後、私達は明るい緑がかった白い光が急速に近づいて来るのに気づいた。かなり近づいてきたとき、



■UFO WISCONSINのホームページに見られるUFO写真と図
(前ページも)

光が3つで一組みになっているのが分かった。緑のが上にあって、底には白、そしてくすんだ赤が真ん中にあって、他の2つの間を前後に揺れていた。それらはフォース・フィールドで結ばれているようだったので、私は「フォース・コネクティング・シップス」と呼んだ。カメラをズームしたところ、真ん中の赤いライトが他の2つの光と輪ゴムか何かでくっつけられているようで、計画的パターンで動いているようだった。それらが一緒に動く様子としては整然としていた。不幸にも(自分では録画できていると思っていたが)私のカメラでは録画できていなかった。(编者註: 编者も経験があるが、スタンバイのまま録画ボタンを押したつもりで、録画されないままモニターを見ていた事が考えられる。)しかし、他の人の録画でなかなか良く撮れているテープのコピーがある。(编者註: UFO WISCONSINのホームページに紹介されている。しかし编者のiMacでは画像が得られなかった。)

それらがほぼ真上に来た時、私はある種の不思議な技術によって(それらが)飛行しているのだな、と思った。雨が降っていたので、見物人は100人がそこらになっていたと思うが、それにしても、彼ら(飛行物体)が我々にショーを見せてくれたのは素晴しかった。あれらが何だったのか私には分からないが、とにかく何らかの意味はあると思う。このフェスティバルは12年間開催されてきたが、しばしばUFOが目撃されている。以下のサイトで2つのビデオが見られる。

http://www.ufowisconsin.com/bensons/ufodaze2002_sightings.html

■2002年7月22日 米国カリフォルニアで20個のライトがついた 三角形の飛行物体

ホーソンシティ…2002年7月22日午後10時15分ころ、カリフォルニアの沿岸部を飛行する巨大な三角形の飛行物体が目撃された。翌晩、目撃者は「午後10時21分にパティオへ出たら、一連の光が見えたので、家の中へ駆けこんでカムコーダーをつかみ、このスペクタクルを数秒間録画した。20個ほどの赤いサクランボのようなライトをフラッシュさせていた。それらすべては南東に向けてフラッシュしていた。はじめは三角形のパターンだったが、次第に三日月形を形成しはじめた。いくつかの物体がもっと遠くに

あり、それらは形状の一部ではなかった。私は2人の友人と外で話をしていたが、北から(南に向かって)接近してくるいくつかの赤いライトが我々の注意をひきつけた。我々が見たのは巨大なブーメランかV字形の物体で、先端に白く輝くライトがあり、周囲には赤く点滅するライトがついていた。(たぶん4つか5つが白いライト側面上にあった)

我々は皆、その巨大さに感銘を受け、その物体が海岸線に沿って飛んで行くのを見続けた。見えなくなるまでずっと見続けていた。その物体はまったくの無音で、空の向こう側へゆっくりと滑空するように思われた。ショックだったのは、それがLAXの飛行経路の上を飛んだのに、ニュースにもならなかったことだ。

パロス ベルデス…三角形の飛行物体が火曜(编者註: 7月23日の事と思われる)の午後11時直前に、海岸に沿ってレドンド・ビーチの方角からゆっくりと移動してきたと報告されている。スカイウォッチインターナショナルのエグゼクティブディレクター、ビル・ハミルトンに感謝。

■2002年7月25日 ニューヨークに6つの燃えるような光が出現 東海岸のUFOフラップ始まる

シャーリー(ロングアイランド)…ブルックベン空港のフライト・インストラクターが、ロングアイランドの南部海岸にフォーメーションを組んで飛行する6つの燃えるような光を見たと言っている。

21才のパイロットによると「私は2002年7月25日午後9時30分に、シャーリー近辺で飛行機を操縦していたのだが、学生との夜間飛行だった。ロングアイランドのスミスポイント公園(TWA800墜落地点の南)(编者註: 1996年7月17日、トランス・ワールド航空800便がロングアイランド上空で爆発墜落した事故)で、ふと見ると、8マイル沖合いに6つの輝く黄色い光を見つけた。

これらの光は直線状に並んでおり、2つは左にくっついて、残りの4つは右の方でよろめいていた。私はUNICOM周波数122.80MHZで他のパイロットとコンタクトをとり、そしてそれは確認された。パイロットの一人は他の会社航空機にいる同僚のインストラクターだった。

私がロードアイランドへ向かう北西方向へ飛行しはじめた後、それらの光が左から右へ秩序をもって6-5と消えるのを見た。それから4-3-2-1…と消えていった。

私はそれがレーダー上で確認できたかどうか地元の航空管制と連絡をとった。彼等は「イエス」と答えた。彼等もそれが何なのか、はじめは分からなかったようだが、いまレーダースクリーンから消えたことから軍の活動だったのだろうと思っていた。

私の記したエリアが軍事活動で知られていることはわかっているし、それがありそうな答えであることもわかっている。しかし、わからないのは、これらの物体がどうやってホバリングすることが出来たか…ということだ。な

ぜなら、その夜は中秋の名月でほぼ満月に近く、それらがボートや航空機灯火ではなかった、と断言できるからだ。また、そこにボートはなかったし、何かの閃光なら発射されたところがある筈だ。それに、それらはほぼ完全に順番に暗くなって消えていった。

—NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝—

■2002年7月26日

F-16、未確認航空機を追跡す

スティーブ・ヴォーゲル(ワシントンポスト スタッフライター) 2002年7月27日土曜日

レニー・ロジャースにとって空軍機(複数)がウォルドルフの自宅を真夜中に低空飛行するなどということは全く異常な事であった。昨日(7月26日)早く、彼が外に見た(と思っている)ものは彼を驚かせた。

「それは驚異的スピードで飛行するライトブルーの物体だった」とロジャーは話す。

「空軍機はその物体のすぐ後ろにいて追いかけていたんだ。でも、その物体は空軍機を塵の中に残して去っていった。『これらの空軍機はUFOを追跡していたんだと思う。』…って隣人に言ったんだ。」

軍職員はアンドリュース空軍基地から飛び立ったF-16戦闘機が、地区レーダーが上空に未確認飛行物体を捉えた後、昨日早くにスクランブル発進したことを確認している。

しかし、彼らは空軍機が奇妙で高速の青い飛行物体を追跡していたというアイデアについては、あざけり笑っている。

「我々は興味深い航跡を見つけたので、数機の航空機を発進させた」とコロラドスプリングスのNORAD広報官ダグラス・マーティン少佐は語った。

同時に軍オフィサーは、ジェット機が何を追跡したのかについては、その機体が消えてしまったため、不明だと言っている。

NORADの別の広報官バリー・ヴェナブル少佐は「いくつかのシナリオが考えられるが、我々はその物体が何だったかはわからない」と言う。

軍の発表によると、昨日午前1時頃、レーダーに低空をゆっくりと飛んでいる飛行物体を捉えた。管制はその未確認飛行物体とラジオでの交信を確立することができず、NORADもその旨通知を受けた。

アンドリュース空軍基地から空対空ミサイルを搭載したF-16が発進した時、未確認飛行物体の航跡はレーダーから消え去った…と匿名で軍広報官が語っている。



■火球状のUFOを追跡したF-16戦闘機

NORADの公式発表によると、アンドリュース空軍基地からF-16を飛ばしたD.C.エアナショナルガード第113エアウィングのパイロットは、特に普段と変わったことはなかった、と報告しているという。上級士官スティーブ・チエースも「通常の発進だった」と言っている。また、9月11日のテロ攻撃以来、ワシントンを守るエアディフェンスシステムの一貫として、アンドリュース空軍基地に於いては24時間体制で警戒できるようパイロットと武装航空機を用意しているという。

しかし、いまだにロジャースは彼の見た物が「決して通常の発進ではなかった」と確信している。

「それはまるで、尾のない流れ星のようだった。あんなものは見たことがない」と。

2002年ワシントンポスト

■2002年7月26日

米国ワシントンDC、NUFORC、FOX、CNN、WTOP…UFO報告相次ぐ

NUFORC(編者註:National UFO Reporting Centerの略。本部をシアトルに置く全国的なUFO報告センターで、1998年に情報受け付けが開始された。ホームページにはUFO目撃報告様式が掲示され、常時UFO報告を受け付けている。商業用パイロット、天文学者、消防士、法律家、芸術家等からの「円盤」「球」の目撃報告が提出されているという。)のピーター・ダベンポートの報告によると「2002年7月26日、我々はアンドリュース空軍基地の上空で、1個かそれ以上の赤やオレンジの光が青い楕円形に変形するという報告を数多く受け取った」とのことだ。

それらの存在がはじめに確認されたのは、WTOPラジオステーションに数人のリスナーが電話で問い合わせたからだった。

NORAD(編者註:North American Aerospace Defense Commandの略でノーラッド、北米航空宇宙防衛軍。北米大陸へのミサイルや爆撃機の侵入をいち早く探知し、警報を発する任務をもつ)のレーダーでもとらえ、スクランブル発進もしたが、それらはすでに消え去っていた。

第113航空団は、事に対応するため、アンドリュースにおいて24時間警戒態勢をとり、パイロットと武装した航空機を待機システムの一部として待機させている。

FOXとMSNBCは「ウォルドルフのレニー・ロジャースは主張する」として次のように報道した。「午前2時直前に、彼は空を横切ってすごい速さで飛ぶ大きな青い光のボールが筋になるのを見た。しかし、彼を本当に驚かせたのは、軍用ジェット機だった。ジェット機は、ちょうど尾流の上にあったのだ」と。

■2002年6月26日付『EVENING FOX NEWS』より

SHEPARD SMITH:「首都の夜空を青やオレンジ色のライトが走り、パニック状態の人々がラジオ局へ相次いで電話した。これは冗談ではない。アメリカのジェット戦闘機が追撃…NORADは2機のF-16が緊急発進したことをFOXニュースが確認したが、何も見つけられなかった!…という。

アンドリュース空軍基地上空での謎…それは大統領が使用するものだ。いまFOXは、我々D.C.ニュース編集室か

らブライアン・ウィルソンからのライブ報告を流している。」

SHEPARD SMITH: 「ブライアンですか?」

BRIAN WILSON: 「シェパード、正直云って、今の時点では答えよりも疑問の方がずっと多いんだ。でも、メリーランドの夜空で何か奇妙な事が起きているってことだけは確かだ。我々にわかっているのは、首都からそう遠くないメリーランド上空に午前1時、NORADの職員が何か確認できない物体を見つけたということだ。その航跡に関心を持った彼ら(NORAD)は、いったい何なのか確認するために2機のDC国防空軍ジェットを緊急発進させた。いまDC国防空軍は2機のF-16第113隊が(その飛行物体が)何にせよ、NORADの心配の種を要撃する為に向かったことを確認している。しかしながら、パイロットがその空域に到達しても、彼らは何も見つけられなかったと言っている。今、NORADの要員は、追跡していた物体の正確な位置、方向、あるいは速度に関する詳細を提供しようとはしなかった。

個人の報告としては、アンドリュース空軍基地や首都からさほど遠くないところに住む何人もの人々が、ほとんど同時に高速で動くまばゆい青い光を空に目撃したと地元ラジオ局WTOPに電話で報告している。彼らはその光が軍用ジェット機に追われていたと主張し続けている。一人の目撃者がラジオ局に話したところによると、ジェット機はまさにその(光)の尾のところをいたという。(引用文)『それ(光)が動く時にはジェット機がそのすぐ後ろにいた』調査が進行中だ。

しかし、軍報道官シェルドン・スミス大尉のもう一つの引用文には『おかしな光についての、いかなる情報も我々は持っていない』とある。

ところで、これは1952年、大見出しのニュースになった首都上空の未確認飛行物体の一連の事件からちょうど50年目に起きている。シェパード、我々は事の成り行きを見守っていくよ」

SHEPARD SMITH: 「ワシントンのブライアン・ウィルソンでした」

ケニー・ヤングに感謝。

■2002年7月26日

米国カリフォルニアの空軍基地上空にUFO

エドワード空軍基地…2002年7月26日午前3時43分、基地上空およそ1000フィートで非常に明るい光が目撃された。その光は安定した光を発し、ゆっくりと2~3分間北へ移動し、2機の航空機に追跡された。その光は1機の航空機のすぐ近くで突然消滅した。

NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝。

■2002年7月26日

メリーランドでカップルがジェット機の騒音を聞く

ウォールドルフ…ある カップルが飛行機のひどい騒音によって深い眠りからたたき起された。それは非常に近かったのか、もしくは音がすごく大きかったからなのか。

カップルの報告によると「9月11日の(テロ)攻撃の時みたいに、私たちも攻撃されたのかと思いました。戦場にいたみたいでした。ものすごい騒音がした後、飛び去ってしまいました。まるで、何事もなかったように。で、私もまた

眠ったんです。そのことについては、私たちが住むウォールドルフでのUFO目撃ニュースを午後10時のFOX 5 ニュースで見るまで、すっかり忘れていました。ニュースでは2機のF-16戦闘機が配置されたと云っていましたが。私たちはきっとそのジェット機かもしくはUFOが家の上を飛んで行った音を聞いたにちがいありません」とのことだ。NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝。

■2002年7月26日

バージニアで男性が野球ボールサイズの光を目撃

アーリントン…二人の目撃者が「午前1時15分ごろ、私と息子は猫を追って裏庭に出ていったんです。猫は2階の窓の外の棚のところをいたんですが、猫が下に降りてくるまで、いったいどれだけ待たなくちゃいけないんだろうと思いつつ見上げていました。その時、二つの丸い白い光が家の上空を東にあるいは多少北東に動きながら飛んで来たのです。それら(の光)はちょうど手を伸ばして持った時の野球ボールくらいの大きさでした。私達2人がそれを見て、2分後にそれらは再び西から東/北東へと戻ってきたんです。どれくらい遠くにあったかは分からないんですが、今度はそれらの光が2つとも停止しました。球は小さかったようですが、近くに見えました。それらは一瞬停止した後、ひとつが上空ではなく来た道の右方向へ飛び去りました。でも、北西の前にあったのと同じ角度のところに戻ってきました。もう一つの物体は、たぶん5秒間くらい静止したままでいて、それから最初来た方向、北東へ向かっていきました。はじめは並んで、それからは分かれて飛んでいましたが、確かに2つの別々の物体でした。私たちは大急ぎでビデオカメラをつかんで庭へ走り出たんですが、もう何も見えませんでした。音は全くしなかったです。あの光が近くにあってのでなければ、かなり巨大であったにちがいありません。類似の目撃が我々から10マイルほどのところにあるメリーランドのウォールドルフでもあった。」

NUFORCのピーター・ダベンポートに感謝

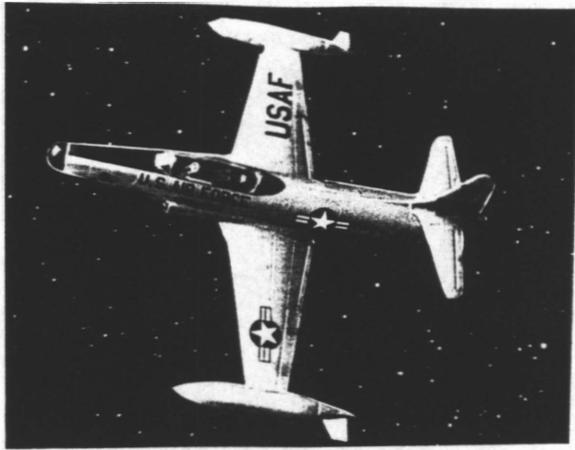
Editor's Note:UFOはニューヨークからワシントンD.C.まで、多くの人々によって目撃された。NORADはレーダー上でUFOを追跡、要撃するためにF-16戦闘機を発進させたが、UFOの位置を定かにすることは出来なかった。この事件は1952年のワシントンD.C.で起きたUFO事件をリピートしているように思われる。

■50年前の先週末

FAAコントローラーはレーダー上に多数のUFOを発見、空軍は報告を受けてF-94迎撃機を侵入者追跡の為に発進させた。レーダーオペレーターのハーワード・コンクリンは「レーダーオペレーター達はUFOの位置と航跡がわかっていたので、UFOが近づいた時、目視する為、外へ出ていった」と云う。

空軍は報告を否定することに決め、それら(レーダー上のUFO)が逆転層による誤認のレーダー反射であったと主張した。1機のF-94が失われたという噂もあったが、この報告は一度も確認されたことがない。コンクリンは同様にUFOsが次の日の夜もどって来て首都を荒し回り、また追跡されたことを明らかにしたが、しかし、今回は空軍に通知されなかった。またしてもUFOは技術によってではなく否認によって蔽られ、うやむやにされてしまった。

今週のレーダー追跡は隕石や人工衛星あるいはレーダー反射の誤認のようではなかったし、NORADの戦闘機発進ではなかったようだ。何週間もの間、多くの目撃者がその



■50年前の7月26日夜UFOを追跡したF-94戦闘機(モデル)

区域でUFOを報告した。NORADはUFOがもしかしたら小さな飛行場に着陸しようとしてレーダー上から消えた小さな飛行機だったかも知れない、と述べた。その夜早くにおけるニューヨークでの目撃において、UFOはまずレーダーにしばらく現われ、それからワシントンDCに近づいたように見える。スペースコマンドは他形式によるコンタクトについては否定している。アンドリュース空軍基地においてF-16のパイロット達は24時間の警戒体制にある。私が警戒体制にあった時には、発進の命令を受けてから最大でも10分以内に離陸を求められていた。

パイロット達は武装し燃料が供給された航空機のそばで準備する必要があった。エンジンをスタートさせ滑走路の端まで行くのには数分を要する。

UFOが追跡されなかったのは別に驚くことではない。UFOはめちゃめちゃ速く、そしてパイロットやレーダーを騙す一連の戦術にたけているからだ。私はANGがUFO追跡に成功するよう、ビデオを含む諜報要旨説明(情報提供)をよろこんで行うつもりだ。

■アルゼンチンでの目撃

サンホセ…昨夜21時ごろ(编者註:アルゼンチンのUFO情報はヴェノスアイレスとパリッシュにおけるキャトルミューティレーションを含むが、ここでは割愛した。「昨夜」とは7月25日か26日の頃と思われる)車で帰宅途中のカップルが大きいライトブルーの光が色と大きさを変えながらラグーン(礁湖)の上を飛んでゆくのを見た。色は赤くてフラッシュを発していた。数分後、地元住民が「光が降りてきて、木のうしろに隠れたのを見た」とエル・フェルテに連絡した。1時間後の22時30分に他の2人が同じ現象を目撃した。

スコット・コラレスのヒスパニック翻訳に感謝。アリシア・ロッシに特別の感謝。

■2002年7月26日前後 アゾフ海上空の連続目撃

2002年7月26日金曜日午後10時50分ごろ、シリウスよりも明るく輝く白い星のような物体がクリミア半島の上空をアゾフ海北東方向へ飛んでいくのが目撃された。それは普通の人工衛星のようでもあったが、目撃者は皆、人工衛星に比べて2倍も速く飛んでいたと述べている。明るいフラッシュと動く星のような物体がアゾフ海上空で7月24、25、26、27日の間、2100時間(编者註:この数値は日数に

すると87.5日になるが、原文でもnightly after 2100 hours on Julyとあり、誤植か何らかのミスによるものと思われる)にわたってほとんど毎晩見られた。アゾフ海と黒海の水中にはUFO基地があるとの多数の噂がある。これらは水中に潜っていく物体の目撃も含んでいる。「私自身、過去5年間に10を越えるUFOを目撃している」ウクライナのユーフォロジカル協会(UKUFAS)のコーディネーターであり、ウクライナMUFONの専門研究者アントン・アンファロフに感謝。

EDITOR'S NOTE: 6つのライトがついたUFO活動の情報は増加している。

■イリノイのミステリーサークル

ネーパーヴィル…『デイリー・ヘラルド』のスタッフライター、スーザン・スティーヴンは2002年7月18日、シカゴ郊外でアパートの横にある大豆畑にミステリーサークルが現われたと報じている。

ネーパーヴィルの農民はミステリアスなクロップ・サークルを「悪意あるイタズラ」と呼んだ。エド・コリガンが虫や雑草を調べるためネーパーヴィルの大豆畑に来て、トラックから降りた時、最初に気づいたのは大豆畑から漂う芳香だった。それは新しく刈り取られたばかりの芝生のような香りがした。折れ曲がった植物が識別できぬほど幅広く畑を横切って円を描き、正確なパターンで広がっているのを見た。コリガンは農民スティーブ・ペーニングに損害を記録するよう呼び出した。一週間後になっても、二人とも誰がもしくは何がサークルを作ったのか、何もわからずじま이었다。

「今までこれほどクレイジーな出来事聞いたことがあるかい?」とペーニングはたずねた。「信じられない」

空から見えるのは一連の折れた(植物の)同心円がデイエル通りから畑の中にきざまれている様子だ。それは大方英国でみられる他のクロップ・サークルのようで複雑な模様が畑の中にきざまれ、人々の多くは芸術的でさえある、と主張している。

しかし、何人かのミステリーサークル調査員は、磁界や暴風、UFOの着陸などを含め、いくつかの原因があると仮定している。ネーパーヴィルのクロップサークルが大型予算長編でその現象を扱った映画の公開2週間前に現われたというのは見過ごされない事実である。スリラー映画『サイン』で、メル・ギブソンは彼の土地に妙なサークルを発見する農民の役を演ずる。英国のウィルトシャーで、その映画の中で使われたのと同じデザインのみステリーサークルが模倣出現しており、おまけにミッキーマウスの耳がくっついていて一映画をじゃまするように、ディズニーにご挨拶申し上げるといふことか。ネーパーヴィルのサークルも同様のイタズラかどうか、誰もが推測している。

MUFONの調査員ウィリアム・レオンはサークルが人間の手によるものか他の現象によるものかを決定するには、土壌分析が有効だと云う。彼が1994年、レモントのアルゴンヌ国立研究所に近いガマ畑で一連の11個のサークルを調べた時、84フィート測ったサークルの内外において、植物の遺伝子の相違をみつけたという。

「これらのサークルがUFOによって作られたとハッキリ断言するようなことは出来ない」とレオンは云った。「何人かはUFOが作ったと云い、何人かは違うと云う。僕には説明がつかないね。とにかく数多くの異なった説があるんだ」と。

有名UFO事件の生き証人、グレア博士の活躍で浮上 『DISCLOSURE』計画の躍進と波紋

本誌にSteven Greer(本誌は当時「スティーブン・グリアー」と表記したが、最近の資料の多くは「スティーブ・グレア」「スティーブ・グリア」などの表記が多い。しかし最近、一部で「スティーブン・グリアー」と改めた表記もみられるので、そのままにした。)が登場したのは1993年No.8「躍進するCPR、国連に接近」の記事においてであった。

それによると、1991年米シカゴでのMUFONの国際シンポジウムでCPRのコリン・アンドリュースとCSETI(スィー・セタイー)のグリア博士は初めて会い、共同研究を話し合った。そして、1992年7月21～22日、CSETIチームとCPRチームは、ウッドボロー・ヒル(Woodborough Hill)の見える場所でサークル・メーカーにコミュニケートする「遠距離観察実験」を行った。このリンダ・ハウ女史も参加していた。

この時に彼らが目撃した現象については稚拙な翻訳だが本誌で紹介した。特筆すべきは、グリア博士が上空のUFOに向けて光のビームによる3回のフラッシュを向けたとき、ヘスダーレン怪光のように物体は同じ反復を正確に繰り返したことである。すなわち「光による交換」が行われたことであった。

それからの長い年月の間、グリア博士、アンドリュース、ハウ女史にどのような変化や事情が生じたかは知る由もないが、彼らが健在であり、いまなお活動を展開していることは周知の事実である。

とくにグリア博士による軍関係者、政府関係者によるUFOとの関わりを公にすべく展開されるDISCLOSURE計画は、日本のUFO界でも話題となっている。

本誌がこのグリア博士の活動について最初に知ったのは、シアトルの岡村亮氏からの情報によってだが、その後、インターネット上のTateno氏による

「ET&UFO&CSETI」に詳細なグリア博士情報が公開されているのを知った。UFO党の森脇党首からも、この資料の送付と指摘を戴いた。

1940年代から1950年代におけるUFO事件は、あの米空軍でさえ早々に「宇宙船説」をきめてしまうほど大きな意味を持っていた。

それら事件の多くは、我々日本人にとって、現地の研究者やジャーナリストによる書籍や文書、若干の記録フィルムや写真によって、間接的にしか知ることが出来ない。その目撃当事者と会見したり、現場検証が出来るのは当時国に住む限られた人々である。しかし、事件から30年、40年と年月が経過するに従い、生き証人の多くは亡くなってゆく。その人々を発掘し、説得して「証人」として公の場で姿と証言を公開し、後世に残すという作業は理想的だが誰でも出来るという訳ではない。それをやってのたグリア博士等のチームには敬服するほかない。

ただ編者が思うには、「UFOの事実」と「UFOへの期待」が区別されずに展開されているのが気になる。

中国のUFO研究者の主張にも見られるが、「UFOを研究することによって、新しいエネルギー源、テクノロジーを手に入れ、文明の発展に貢献する」という期待感は、「墜落円盤の回収」というテーマが大きな役割を果たしているとみられる。直接的な役割としては、軍や政府が「異



■いま最も注目されているグレア博士。

星からの墜落円盤」を保管し、その機体から得られた技術を軍や政府は秘密裡に占有しているので、これを公開せよ、という主張においてである。

しかし、信頼できる数々のUFO事件をみると、UFOというものは、我々に積極的に接近するというよりも、接触を拒みつつも、時折航空機に接近して「その高度な性能と存在感を見せつける」という段階にとどまっており、その高度な機体が地面に激突して破壊したり、搭乗者が死体を人目にさらす、という展開は、UFO事件の性質上、考えにくいのである。

「UFO技術の獲得」…この期待感を持つ研究家は、様々な「浮上・航行理論」や「エネルギー実験装置」あるいは「墜落UFOの復元」などで、それなりの分野を形成しており、支持者も多い。

だが、昨今のUFO現象そのものの検証作業の現状からは、やや夢想に走り過ぎていると言わざるを得ない。またその方向性は、現状の「文明」を是とし、それを発展させる立場からの考えであり、多くの識者が指摘する「行き詰まりの文明」「自然回帰」という実態に沿っているとは考えにくい。

人類はいま、永遠に続くかと思われる「平和実現努力」をこれからも続けてゆくだろうし、人類は高度なエネルギー源よりも「本当の人間らしさ」を迫及するために労力と時間を費やすだろう。

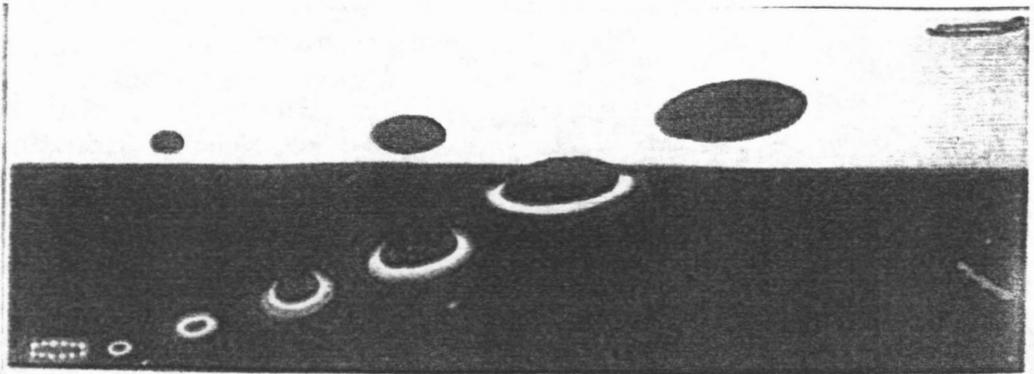
「証言者」にとっては、多くの様々な「事実」があるだろう。晩年から死の床につく年代になったそれらの証言者が、勇気をもって自己の体験を証言し、それを記録に残しておくという計画への参加は、我々自身の「生き方」にも通じた崇高な理念の実践であり、歓迎すべきことである。

UFO問題の複雑さは、UFOが未知のものである限り、「様々な未知」を産出する資源であることだ。過去現在未来を通じて終始一貫したUFO現象であったとしても、それらを受け取り考え、伝えようとする我々の側に複雑怪奇な性質が宿っている。

われわれが「証言者」の言葉の中から、UFO現象について、より深い洞察と理解が得られるなら、「証言者」の存在はUFO現代史にとって有効なものとなるだろう。

以下は2001年5月9日、米国ワシントンにあるナシヨナ

■航空機が空中で遭遇する異形の構造物については、同じ空を飛ぶ者としてのパイロットが、よくそれを認識できる。このスーパー・コニーには、そうした人材が大勢乗っていた。



Filers Research Institute

ル・プレス・クラブにおける記者会見を参観した岡村氏より提供されたビデオテープと、Tateno氏による「ET、UFOに関する秘密公開運動の経過」「目撃者の証言」から、いくつか選んで紹介するものである。

■スティーブン・グレア博士

1990年にノースカロライナにある病院の緊急病棟の医師。彼はCSETI(Center for the Study of Extraterrestrial)を創設し、スターライト・プロジェクト(UFOを取り巻く秘密の公開を米国議会の公開公聴会で行わせようとするプロジェクト)と第5種接近遭遇(我々人類の方からETを呼び寄せる活動)を展開し、2000年8月から100人におよぶUFO、ETに関する直接体験をしたことのある証人の証言をVTRに記録する「ディスクロージャー・プロジェクト」を開始した。

■米海軍パイロットG.B氏(退役)

(これは日本でも紹介された有名なUFO事件である。)
彼は1951年2月10日、米国海軍機R7V-2スーパー・コンスティレーション機(スーパーコニー)のパイロットで、30人の飛行家などVIPを乗せて大西洋上を飛行中、最初海に浮かぶ町の明りのようなものを発見した。そこから1個が分離して上昇、機に接近、それは機に同乗していた飛行家によっても観察された。G.B.氏はガンダー空港レーダーを呼び、その物体がレーダーにも映っているのを確認した。パイロット達はその「巨大な皿」の容積に驚き、直径110~150mと見積もった。G.B.氏は、その物体の縁に沿った光の輪、電磁作用によるジャイロスコープの回転、姿勢変化、速度変化を目撃した。この遭遇再現図が「UFO Information Center」のホームページで紹介されているので、ここに掲げる。



■米空軍チャック・ソレルス軍曹(退役)

彼は1965年エドワード空軍基地で、基地上空に現われた7個のUFOが急速度で直角旋回など当時の航空機には不可

能な飛行を目撃。物体は複数のレーダーで捉えられ、数名が肉眼で目撃した。



■米空軍マイケル・W・スミス氏

彼は航空管制官でオレゴンとミシガンの施設で複数の職員がUFOの高速移動をレーダー面で目撃した事実の証人。



■メキシコ上級航空管制官エンリケ・コルベック氏

彼はメキシコシティ国際空港で頻りにUFOを肉眼とレーダーで目撃した。UFOは高速で回転したり、瞬時にヘアピンターンを行った。ある目撃では、32人の管制官が赤と白の光が同時に着陸する航空機の周りを動いているのを見た。メキシコの4つの管制センターからUFOについての報告がきている。

■米国科学者リチャード・ヘインズ博士

彼は1960年代半ばにNASAで科学調査員をしていた。彼はジェミニ、アポロ、スカイラブ計画でも仕事をしたことがある。過去30年間、彼は300以上の説明不可能な空中での肉眼、レーダーによる目撃例を集めている。数多くの海外での事例を取り上げ、米国の報告と非常に類似している



と彼は述べる。米国の事例として、あるB-52の機長は、5個の球体が機体左右の翼先端、後部、上部に現われ、同じ速度と高度でついてきたと語っている。機長は様々な操縦で球体を振り切ろうとしたが、それぞれの球体は正確な位置を保ち続けた。



■米海軍フランクリン・カーター氏

彼はレーダー技術者として50年代と60年代に海軍で働いた。彼は時速3400マイル(5440km)で動く物体と明らかにレーダーで接触したと語っている。1957年と1958年に、他のレーダー技師もこの異常高速物体を目撃している。当時、最も速い航空機は時速1100マイル(1760km)であった。



■米海軍フレデリック・マーシャル・フォックス准将(退役)

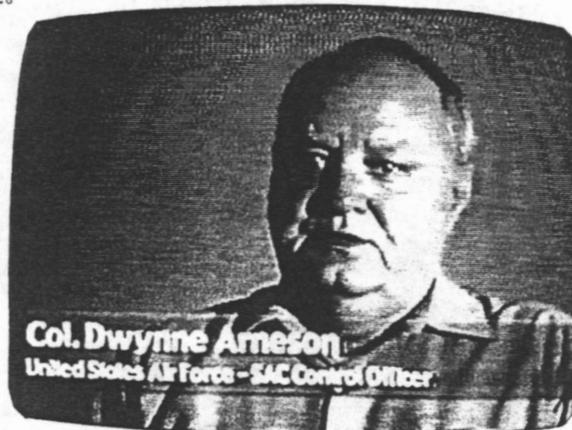
彼は60年代に海軍戦闘機に乗っていた。ベトナムにも従軍し、33年間アメリカン航空で働き引退した。証言の中

で彼は、JANAP146Eという出版物があり、そこにはUFO現象に関する情報を暴露した者には1万ドル以下の罰金と10年の懲役を科すと記されていた。1964年、A4スカイホーク機で飛んでいるときに、突然30フィートほどの黒い円盤形の物体が左側に現われたという。また任期中に、円盤や葉巻型のUFOが軍事施設の上を飛んでいるのを数多く目撃し、ある時には2つの赤い光が3秒間で夜空を地平線から地平線まで移動したという。彼は馬鹿にされるのを恐れてこの話題を他の人の前に持ち出さなかった。



■米ロバート・サラス機長

彼は空軍アカデミーを卒業し、1964年から1971年まで7年間兵役に就いた。彼はマーチン・マリエッタとロックウェルでも任務に就き、FAAで21年間過ごした。空軍では、彼は航空管制官であり、ミサイル基地の役人であり、タイタン3ミサイルのエンジニアでもあった。彼は1967年3月16日の朝に起ったUFO事件について証言している。警備員が上空のUFOを目撃した直後に、2つの異なった基地施設で16機の核ミサイルが同時に無力化した。警備員は、これらの物体がわずか30フィートの場所にあったにもかかわらず、それを確認することが出来なかった。空軍はこの事件を調査したが、原因を見出すことが出来なかった。



■米空軍ドワイン・アーネソン中佐(退役)

彼は空軍で26年間過ごした。彼は特別な最高機密SCI-TK(Special Compartmented Tango Kilo)のクリアランスを持っていた。彼はボーイングのコンピューター・システム解析者として働き、ライト・パターソン空軍基地の兵站術部門長をしていた。モンタナのマルモストロム空軍基地に勤務しているとき、彼は再びミサイル基地上空に円形のUFOが浮かんでおり、すべてのミサイルが機能不全になったというメッセージを見た。

??宇宙に消えた宇宙飛行士??

イワン・イストチニコフ



■『スプートニク』の表紙



■イワン・イストチニコフ飛行士

■宇宙服を着たイワン・イストチニコフ飛行士

ここにスプートニク協会+ジョアン・フォンクベルタ Joan Fontcuberta著『スプートニク СПУТНИК』という本がある。1999年5月、筑摩書房より発行された。著者はスペイン・バロセロナ生まれの写真家で、1990年、シカゴ・アート・インスティテュートの客員教授に就任。1998年5月に米子コンベンション・センターにて本『スプートニク』の展覧会が開催され、反響を呼んだとのこと。本書での著者の肩書きはスプートニク協会特派員となっている。

本の帯には「米ソ宇宙開発戦争の最中、一人の飛行士と一匹の犬が、宇宙の暗闇へと密かに葬り去られた。ロシア政府の周到な隠蔽工作により歴史から抹殺された恐るべき事件とは?動かし得ぬ証拠と共にその全貌に迫る、戦慄の超ノンフィクション。」とある。ページ数203ページ。ここに、同書を手にしながら、編者が理解した範囲で、その要点を紹介してみたい。

これまで、公式には無人とされていたソユーズ2号に、実は宇宙飛行士が乗っていて、原因不明の事故によって機内からいなくなったというのである。ドッキングのためソユーズ2号に接近したソユーズ3号の報告書には「何者かによる誘拐」が示唆されている。なお本書の翻訳者は菅啓次郎(すが・けいじろう)氏。果たしてこの物語は「事実」か?それとも「小説」か?読者はどう判断されるだろうか?以下の文章の見出しや簡略化した物語の推移は編者によるものだが、重要な文章はそのまま引用してある。その部分は『』でくくって明確にし、翻訳特有の難解さも合わせて吟味の対象とした。

■存在を消された宇宙飛行士

ソユーズ2号の宇宙飛行士であったイワン・イストチニコフの名は宇宙飛行士年鑑には登場せず、殉職者記念碑にも見られない。

なぜならば、ソユーズ2号は「無人」だったからだ。『全記録宇宙開発』に記載されたソユーズ2号の公式飛行

記録は「打ち上げ:1968年10月25日 回収:1968年10月28日 宇宙飛行士:無人 周回数:-(空欄) 飛行時間:-(空欄) 備考:ソユーズ3号とランデブー」となっている。

しかし、宇宙飛行士イワン・イストチニコフの存在は、多数の写真によって明らかであり、その存在が抹殺された事は、宇宙飛行士の記念撮影から修正によって除かれている事実からもわかる。



■イワン・イストチニコフが消された記念写真

著者は宇宙飛行士イワン・イストチニコフの足跡を追ってロシアの関係者に問い合わせを続け、ついに、宇宙計画の歴史の専門家ピョートル・ムラヴェイニクというロシア人にたどりつく。ムラヴェイニクが確認できた「イストチニコフ事件」とは、次のようなものだった。

■カプセルから姿を消したイストチニコフ

『1968年10月25日、ソユーズ2号は宇宙飛行士イワン・イストチニコフ大佐をパイロットとして打ち上げられた。この2号を、ついでゲオルギー・ペレゴヴォイ中佐が乗るソユーズ3号が追いかけて、翌日、軌道上で2つのカプセルのドッキングを試みるということになっていた。

当時はアメリカとロシアが、月面一番乗りをかけてしのぎを削っている時代だった。政治的圧力が技術的現実性に優先され、宇宙旅行はすでに何人かの犠牲者を出していた。この計画に先行するソユーズ1号では、事態ははじめからうまくゆかず、ついには明らかな大失敗に終わった。地表への帰還に際してパラシュートがうまく機能しなかったために、コマロフは激突死をとげたのだ。これで全システムを見直さなくてはならなかった。やがて、コスモス186-188号、ついでコスモス212-213による自動ドッキングの実験が行われ、成功をおさめた。事故により足留めを食ったものの、この成功で人々は楽観的になった。つづく有人ソユーズ計画では最大の注意が払われることになって、誰もが成功を予測した。

しかし、不幸にも、そうはゆかなかつたのだ。ドッキングの試みに失敗したソユーズ2号とソユーズ3号は、お互いから遠ざかり通信も途絶えてしまった。翌日、ふたたび両者が接近したときには、イストチニコフは姿を消して、彼のモジュールには小惑星の激突の痕が見られた。実際には何が起きたのか、科学では知ることができず、謎はただあれこれの推理を呼んだだけで終わった。しかしソ連政府当局は明らかに、またもや事故があったなどとは認めることを拒否し、詭弁による解決を企んだ。ソユーズ2号は有人ではなく、自動操縦だったというのだ。公式記録では、イワン・イストチニコフは打ち上げ前日に病気で死亡していたとされた。これを批判する声を封じるために、彼の家族は監禁され、友人や同僚たちは脅迫され、文書に手が加えられ、写真は修正された。』

■イワン・イストチニコフという人物

イワンは、1930年2月24日、カールガ(kaluga)(モスクワから南へ約150km)のウクライナ出身の貧しい家庭の3男として生まれた。本名はイワン・フォードロヴィチ・イストチニコフ。12才から13才まで、彼はドイツ軍との戦いにおけるゲリラ戦で、「高いビルから少年をロープで敵の戦車に上へ下ろし、戦車の最も弱い部分である砲座の下のすき間に火焰瓶を投げ込む」という作戦でパンサー戦車7台を使用不能にする記録を樹立し、「小さなイワン雷帝」のあだ名で親しまれた。

『母親からはピアノへの興味を、父親からはチェスへの情熱を受け継いだ。動物好きでその調教のためなら無限の忍耐力を発揮し、体操が得意で、あらゆる種類の物を集めることを好んだ。他の子供と違うのは、その收拾ぶりが持続していたことで、何よりも大変な好奇心の持ち主で、驚異的な記憶力に恵まれていた。けれども若きイワンの夢を他にも増して独占したのは、各種の飛行機械だった。』

カールガ市は現代宇宙航行学の創始者にしてロケット・テクノロジーの父ともいわれるコンスタンチン・ツィオルコフスキーが、1898年以来住んだ町である。ツィオルコフスキーが亡くなる少し前、幼いイワンは両親に連れられ



■コンスタンチン・ツィオルコフスキー

てツィオルコフスキーの家を訪れ、ロケットの空気力学についてなど話を聞いた。この時、イワンは「大気圏外飛行船」のパイロットになろうと固く決意したという。

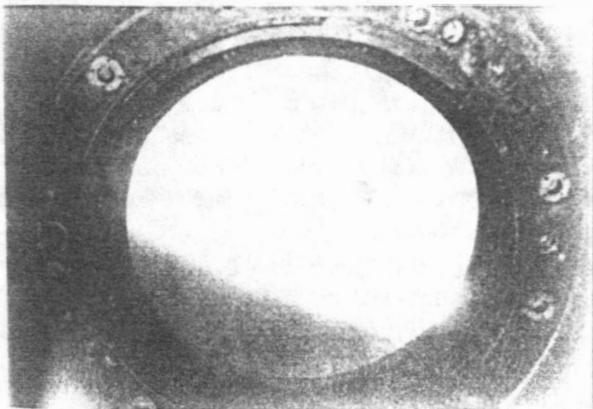
イワンは「飛行学校」に入学。1948年にモスクワ近郊のサラトフ工科大学に進学して航空工学の勉強を始める。同時にイワンは空軍に入隊。理論工学を離れてパイロットの訓練に集中、ミグの操縦士としてソビエト空軍の年鑑で最高級の評価を得た。様々な活躍ののちジュコフスキー空軍・宇宙工科大学に入学。あるセミナーに参加するために訪れた父親の生まれた町で、イリーナという、熱プラズマの磁氣的封じ込めによる制御融合を研究テーマとする若い女性物理学者と出会い、1963年4月に結婚する。そして1968年10月23日、バイコヌールの打ち上げ基地でイリーナは、夫イワンと一頭の雌犬クローカを乗せたソユーズ2号の打ち上げを見送ることになる。

■打ち上げから事故発生まで

『イストチニコフが乗った軌道は楕円形で、近地点が地球から180キロ、遠地点が210キロ。軌道を一周する所要時間は88.5分。軌道周回の12周目、12時33分(グリニッジ標準時7時33分)にバイコヌール上空を通過する直前、ソユーズ3号が打ち上げられ、ランデヴー軌道上へと直接上昇した。

ペレゴヴォイは一周目にイストチニコフに接近し、自動操縦システムを使用して約180メートルにまで接近した。両船は編隊飛行を維持しながら、ほんの数メートルの位置にまで接近。「捕捉」局面では、両船はレーダーにより相互連絡をおこなう。搭載コンピュータが距離、相対速度、角速度、船体の相対角度を測定し、正確な位置を知らせあうのだ。秒速8キロという高速で飛行中だということを考えるなら、この精密さは決定的に重要だ。

最終的なドッキングに先行する「係留」局面では、ペレ



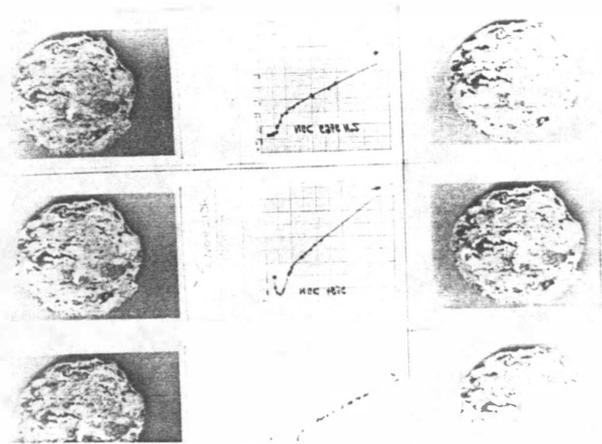
■ソユーズ3号から撮影したソユーズ2号

ゴヴォイの艇が能動的に動き、イストチニコフの艇は受動的に動く。主操作をひきうけるのはペレゴヴォイだが、イストチニコフのほうもソユーズ3号と同軸上に船体が揃うように、方向と体勢の調整をおこなわなくてはならない。しかし、このとき何か致命的なミスが起きたのだ。レーダーからの情報が誤って処理されたか、干渉電波がコンピュータを誤動させたかで、ソユーズ2号のロケット・エンジンの一つが始動してしまい、同船は突然、上方軌道へと急上昇してしまった。イストチニコフが艇を安定させることができた時には、ペレゴヴォイとの連絡は途絶えており、次のランデヴーの機会にむかって軌道修正の計算をやり直すことが必要になった。

この後、何が起きたのか、正確にはわからない。双方向無線伝達システムが2基とも故障し、イストチニコフとの連絡がとれなくなったためだ。数時間後、ソユーズ3号はホーム転移をおこない、ソユーズ2号の待機軌道に移ることができた。両船は10月27日に再接近したものの、その時はすでに、イストチニコフとクローカは跡形もなく姿を消していたのだ。」

■『隕石の謎 ЗАГАДКА МЕТЕОРИТА
サルマン・ザグデーエフ Салман Загдеев
ソユーズ2号の降下モジュールと衝突した隕石についての最初の報告書は、紛失している。なぜそれが無くなってしまったのか、理由はわからない。報告書は23ページからなり、宇宙地質学者ボリス・ラヴレンチェフ博士による詳細な鉱物学的分析を含んでいる。ラヴレンチェフは1978年に亡くなり、この分析結果の写しは残されていなかった。残された書類にあったのは図表と数枚の写真だけで、こうした資料にはしばしばラヴレンチェフ自筆の書きこみがあった。

残された資料から得ることのできる事実を、以下のとおり。隕石は大きさ20×20.5×9.5センチ、地上重量3425グ



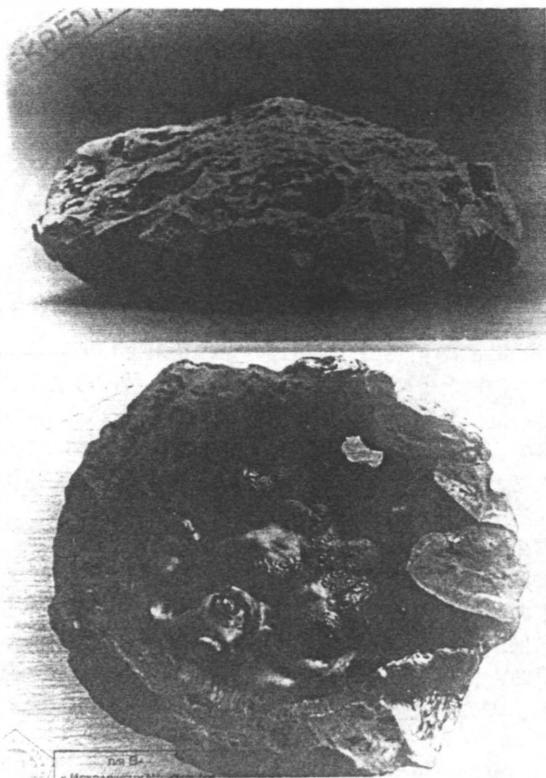
■隕石の成分研究を示す写真。

ラムで、表はごつごつした凸面に、裏側はえぐれ玉虫色の金属的光沢がある凹面になっており、そこにねじれたかたちの突起がある。成分は純鉄ないしは鉄鉱石が多く(83パーセント)、ついでニッケル。それからセレンウム、チタニウム、ウランウムといった一連の微量元素があり、そのいくつかは放射性同位体を豊富に含み、あるいは超高密度の核酸結晶を含む合金となっていた。この組成は専門家には珍しいものではなかった。1908年、シベリアのトゥングスカ地方に落下した起源不明の巨大隕石の組成と、一致したからだ。

この隕石のもっともすばらしい点は--それだけでも事件をとりまく秘密主義を正当化するに十分だといえるのだが--凸面部分の裂け目の奥に、小さな、表面組織のざらつき具合が変わる部分(約12平方センチ)が発見されたことだ。紫外線で検査したところ、線状に並んだ小さな切りこみのような傷痕があることがわかったのだ。もちろん、こうした痕跡がなぜ生じたのか、それは何らかの自然な地質学的現象の結果なのかどうかは、わからなかった。こうした傷痕があるいは人為的な刻み跡で、したがって何らかのメッセージなのではないかという仮説も、当時、検討された。拡大して見ると、それらはメソポタミアの楔形文字の断片にも似ているのだ。この可能性を追求しての「文書」解読も試みられたが、成果はなかった。この解読の試みに従事した人の名前は残っていないが、それが軍の暗号解読班ならびにモスクワ大学の古代言語専門家たちだったことはわかっている。これらの徴がたとえ暗号だったとしても、当時のソ連のいかなる専門家にも、それを解読することはできなかったわけだ。

いうまでもなく、分析にたずさわった全員に、完全な機密厳守が要請された。もし情報が漏れたなら、ただちに外国のメディアがニュースを報道し、社会不安をひきおこしかねない。だが何よりも当局が恐れたのは、この隕石が宇宙計画のみならず体制が誇りとするソ連科学界全体を標的にした、大々的な権威失墜キャンペーンに使われるということだった。ソユーズ2号の事故原因として、もっとも可能性が高く思われるのは、アメリカによる妨害工作だった。もしそうなら、隕石とその偽の「メッセージ」は、異か落とし穴だということになる。ソ連の科学者たちを混乱させ、「宇宙からの通信」を発見したと堂々と発表させるために、仕組まれたものだという事だ。そんな発表の後で、メッセージが偽物だとばれたなら、その恥は超弩級のものになる。

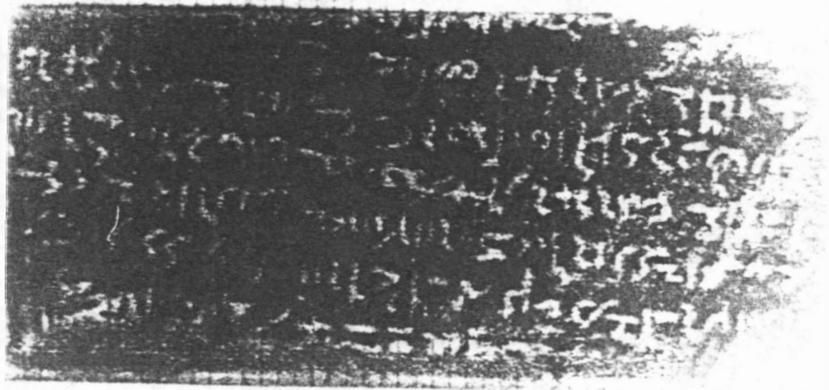
こうして、この隕石が外部宇宙から何らかの知的存在によって送られてきた手紙だという考え方は、詩的ではあるが説得力に乏しく、しかも非常に危険だということになっ



■隕石の側面(上)と裏側(下)裏面に謎の傷跡がある。



■謎の傷跡の見つかった2箇所を示す。



■謎の傷跡は文字のようにも見える。人工的なものか?

た。科学アカデミー指導部は、この方向の解釈を退け、それ以上の調査を禁止した。けれども専門家たちの考えでは、もしこれが罫だというのであれば、いやはやなんとも、こんなによくできたものはない、とのことだった。そしてその称賛の背後には、恐れが隠されている。いったいどうやって、こんなことをやってのけたのだ? どう考えても、それには敵方がもっているとは疑ってもみなかったほどの、資源とテクノロジーの水準が要求されるからだ。したがって、もっとも妥当な説明は、スパイによるものということになる。調査団に潜入した何者か、あるいは誰か裏切り者の科学者が、その刻み目をつけたのだ。この推測に基づいてKGBが数人の容疑者を逮捕したことは、わかっている。

しかしそれ以外にも、気になる要素がある。隕石が宇宙船の側壁にのめりこみながらも、船体を破壊するにはいたらなかったとは、衝突の速度が比較的遅かったことを意味する。飛行物体の衝突というよりも、隕石がカプセルの外壁にくっつき、そのままコバンザメよろしく運んでもらおうとしたかのようなのだ。この天体力学上の謎は科学アカデミーの宇宙物理学者たちを夢中にさせたが、最終的には一幻想的な回答はすべて脇にどけるとして一自然法則の厳密な適用によっては、満足のゆく答えは一つも得られなかったと認めなくてはならなかった。例の刻み痕などは、単なる偶然かもしれない。カプリーズナヤ・プリロード(「自然は気まぐれだ」)。石灰質を含む水が一滴また一滴と落ちて、何世紀もかかって鍾乳石や石筍といった驚異的な建築を作り上げるのであれば、こんな一連の殴り書きめいたものなど、騒ぐほどのものではない。

調査団が結論を出せなかったことを知って、ウスチノフが逆上して怒鳴り散らしたことは有名な話だ。彼の周囲にいるのは、科学が政治の役に立たなくてはならないということに未だ心得ない、無能科学者たちばかりだった。いったい何だっ、何々の「疑いあり」だの突拍子もない火星理論(おとぎばなし)だのばかりを聞かされなくてはならんのだ?

彼にしてみれば必要なのは唯一、それがアメリカ人の仕事だという証拠だけなのに。

■最後の交信記録

「ソユーズ2号とクリミア半島エプパトリアの管制センターとの交信を記録した、テープ68/84A-Iの転写の断片。68年10月26日、グリニッジ標準時09時42分。

エプパトリア=ラドン 【編者註:ソユーズ2号の暗号名】、ラドン、聞こえますか?……………応答願います。ラド

ン、ラドン、聞こえますか? 応答願います、聞こえますか?……………

ソユーズ2号=ダー(はい)、ダー、でもずいぶん声が遠いですね。方向調整システムに問題が生じました。手動では反応しません。後部推進エンジンの一つが、突然始動してしまいました。燃料をむだにしないよう、電気系統のスイッチを切りました。推進燃料をどれだけ置ったかは、これから確認します。電圧が下がっています。エネルギー漏れがあるようです。聞こえますか?……………聞こえますか? 非常事態です。エフパトリア、聞こえますか?

エフパトリア=ラドン、電波が非常に弱くなっていて、ほとんど受信不可能になっています。アンテナの向きを、船体の軸に沿って修正してください。第二送信機の周波数を安定させて下さい。受信確認をお願いします。

ソユーズ2号=エフパトリア、聞こえますか?……………

エフパトリア、聞こえますか? くそっ! 聞こえますか?

お願いします、応答……………

エフパトリア=……………

ソユーズ2号=…………… 』

■『ベレゴヴォイの報告書 ДОКЛАД БЕРЕГОВОГО

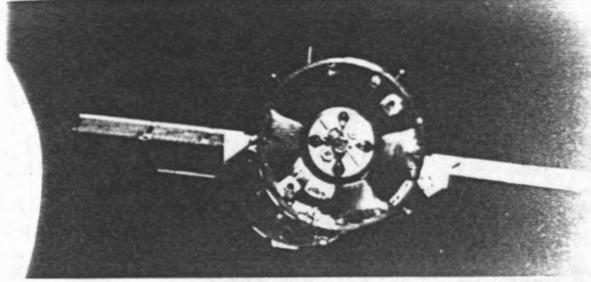
МАЙКЛ АРЕНА+ПЬОТРОЛ МУРАВЕЙНИК

Майкл Арена, Пётр Муравейник

ソユーズ3号に帰還命令が出されて10月30日、パイロットのゲオルギー・ベレゴヴォイ中佐が地上に戻ったとき、中佐は強いショックを受けた状態だった。地球を64周し、94時間51分で260万キロの距離を飛行していた。これが中佐にとっては、最初で最後の宇宙飛行となることだろう。だがそれは、ソユーズ2号の乗組員一人と一匹の何らかの痕跡を求めてあれほど何度も無為のうちに軌道を回ったことからくる疲労のせいではなく、彼の現実感覚を狂わせる一つの謎との激しい対決のせいだったのだ。中佐は、何らかのかたちの幻覚に苦しんだのだろうか?

宇宙飛行士は全員が、任務終了後、飛行中のできごとについての報告書を書かなくてはならない。ベレゴヴォイの報告書は、「重要秘密」として扱われた。そのいくつかの節を見ると、あるいは実際に起ったのかもしれない一連の事件が、身の毛もよだつクレッシエンドによって描かれている。

「……艇はなめらかに回転して、体勢をかすかに修正した。ドッキング操作の初期、自動操縦装置が作動してお



■←旧ソ連宇宙飛行士ゲオルギ・ベルゴボイ(1921年生まれ)
↑宇宙空間のソユーズ宇宙船。→ソユーズ2号にイストチニコフと共に乗った“宇宙犬”

り、私はただスクリーン上でパラメーターを監視していればよかった。ハッチ越しに私は接近プロセスを追うことができ、数枚の写真を撮影することもできた。ラドンとの交信では、声は十分な音量で明瞭に聞こえた。私は同志イストチニコフとちょっと冗談をいいた。ポートレートを撮るから小窓から手をふってくれと頼んだが、二重窓に光が反射して顔はよくわからなかった。彼のことだから、あっかんべをしているにちがいないと想像した。両艇が並ぶと、展望鏡を使つての実視確認ができるようになった。距離はきわめて近く、30メートルほどだった。同志イストチニコフはきわめておしゃべりで、彼ならではのユーモアのセンスの大盤ぶるまいをしてくれた。われわれはまさにドッキングによって歴史的処女喪失を執行しようとしているところであり、これは宇宙探検というよりも端的にいて機械のエロティシズムの歴史において、より重要なのだよ、などといっていた。われわれはこうした喋り方をして、すべては録音されていた。しかし発言の細かいところに意味があるのではなく、それはただ緊張をほぐすための冗談だったのだ……」

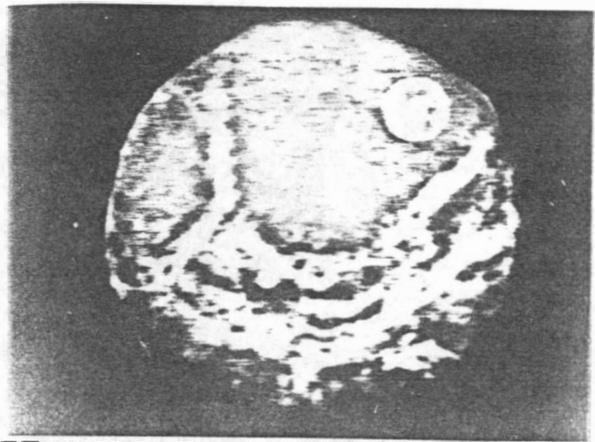
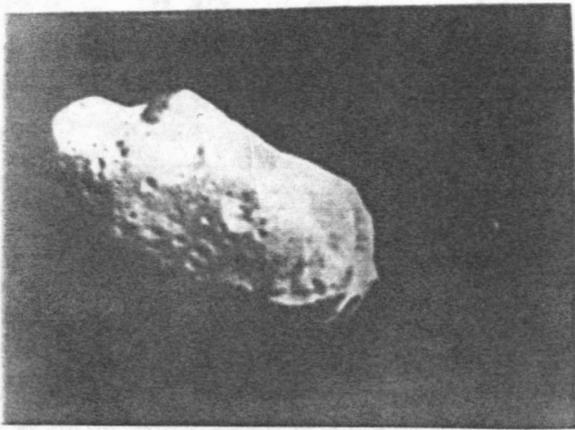
「……ついでモニター画面で、ラドンが完全にはこちらと整列してなくて、傾斜を6度修正しなくてはならないことに気づいた。同志イストチニコフもそれに気づき、前後の微調整用小エンジンを始動させる指令のための遠隔計測データを、コンピュータで処理中だといった。するとそのとき突然、彼の主エンジンが火を噴き、彼の艇は稲妻のように私の艇の上を飛び去っていった。さいわい間一髪で衝突はしなかったが、ジェット噴射による強い動揺を感じた。私はなんとか、もともとの軌道を維持した。しかしラドンは上方の軌道へと遠ざかってしまい、それは私の軌道とは6度の角度で交差する平面上にあった。通信の音声がかえにくくなった。同志イストチニコフは焦っているようで、犬の吠え声が聞こえた。やがてレーダーによって、彼がこちらからは645キロ離れ、未知の軌道へと遠ざかっていることがわかった。そのとき、通信は途絶えた……」

「……はたしてラドンと地上の各連絡地点との通信も困難になっているのかどうかは、私にはわからなかった。とはいっても、同艇がSAU【编者註:システム・アウトマターチェスカヴァ・ウプラヴレーニヤ「自動モード」】によって私との新たなランデヴーのための待機点にゆくことができる以上は、怯えるほどのことはなかった。私が同志イストチニコフの立場だったら、新たな軌道のデータを入力して予定どおりカドック【编者註:「長さ87km、幅63kmの小惑星カドック」】への探測機を発射しただろう。それどころか、残されたエネルギーから断念しなくてはならないとでもいうのであれば、飛行計画をすべて予定通りに遂行するために、犬を連れての最初のEVA【編

者註:エクストラ・ヴィークュラー・アクティヴィティ「船外活動」宇宙遊泳のこと】を試みさせただろう。後、われわれはまさにラドンが、地球との通信が途絶えていたにもかかわらず、そのとおりの決定を下したことを知った……」

「……翌日、グリニッジ標準時10時14分に、ラドンをふたたび実視確認することができるようになった。197キロ×252キロの軌道上にいた。太陽電池パネルを一枚失くすとともに、降下モジュール下部に衝突の跡があった。これが気になった。自然界にある原因を考えると、隕石以外にはありえなかった。隕石との衝突が起こりうる確率は、百万分の1だ。もしそれで船体に亀裂が生じたとしたら、カプセルは急速に減圧し、乗組員には軌道モジュールに移って扉を密閉する余裕もないだろう。そうなると、できることといえば、EVA用に準備した加圧宇宙服を着て降下モジュールに戻るしかない。けれども減圧で非常事態が生じたと考えるにすれば、ラドンはこれといった問題もなく予定通りの飛行を続けているように見える……」

「……通信を回復することはできないままに、もし同志イストチニコフが生きているのなら、私にむかって何らかのかたちで無事を知らせようとするにちがいないと想像した。だが何の合図もなかった。不安にかられつつ、私は彼が死亡したか意識を失っているのだと考えた。まもなく私は、ラドンの後方に4メートルほど離れて、輝く物体が飛行しているのに気づいた。レーダーの画面を見ると、SAUがふたたびラドンを捉え、接近・ドッキングの操作を開始していることがわかる。十分に接近して、その飛行物体の正体を知ると、私は呆然とした。それはミーシン主任技師が愛飲していたウォッカの瓶だったのだ。ズヴェズドニー・ゴロドクでは、新米宇宙飛行士相手に、伝統的におこなわれる悪ふざけがある。教官が大まじめな顔で、問題が生じたら瓶にSOSのメッセージを入れて真空にむかって投げ、それから宇宙遭難救助隊がやってくるのをじっと待つべし、と教えるのだ。新人たちの困惑した顔が、ベテランたちに大笑いさせるのだった。打ち上げ前イワンは、EVA実行の際に瓶を投げられるよう準備がしてある、と私にいっていた。根っからの悪童である彼は、ついにあの罪のないいたずらを執行してみせたのだ。だが、どんなメッセージが書かれているのか? おそらく決定的な鍵が、そこにあるのではないか。しかしどうあがいても、それを回収する術はなかった。瓶は永遠に、197キロ×252キロの軌道を回り続けることだろう……」



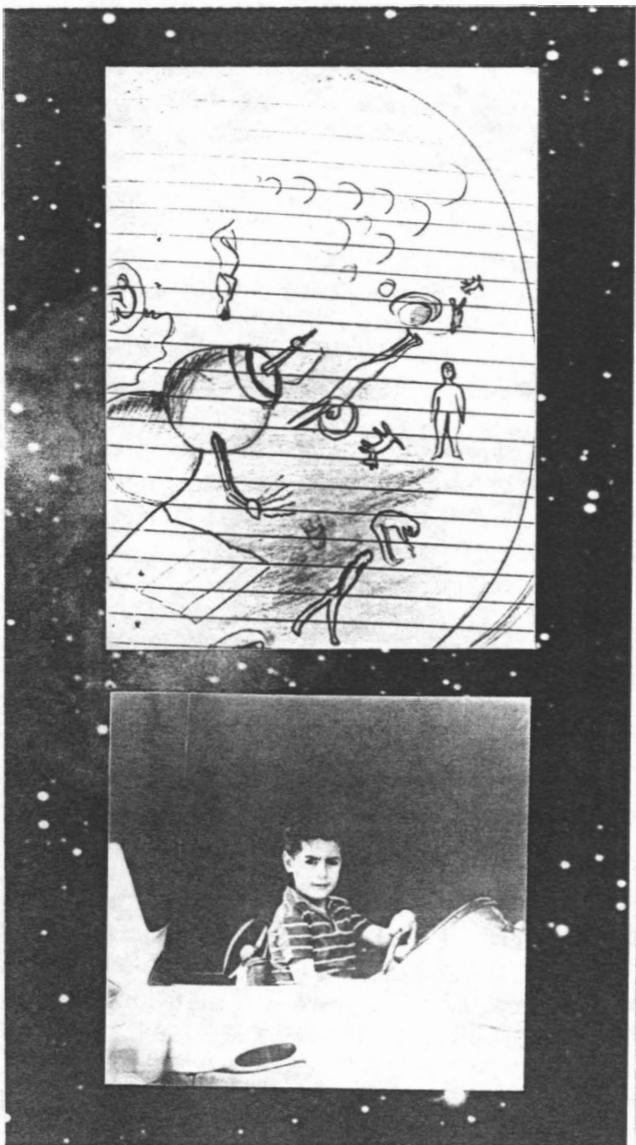
■ソユーズ2号と3号の目標とされている小惑星「カドック」とその周囲を巡る衛星の写真。左の細長い小惑星とそれを巡る衛星の写真は見た覚えがあるが、右の写真は初めて見る。右下はイストチニコフの描いた宇宙遊泳の夢?そしてその下は子供時代

「……私は、私が判断するところにしたがって、かくあったのではないかと思われることを記すように、と命ぜられた。たとえどれほど突拍子もないような説明であっても、隠すことはない、と。私は一介のパイロットであり、自分に事件を説明することができるとは思っていない。私に述べることでできるいくつかの仮説にも、まあまあもつともなものもあれば、ひたすら噴飯を誘うものもあることは、わかっている。思いつく第一の可能性は、単刀直入にいて敵国の破壊工作だが、それがいかにして実現できたのかとなると、なんともわからない。もう一つの可能性は、信号同士が重なってまったく別の信号を生み、それを搭載コンピュータが致命的に誤読してしまったということ(たとえば「船外作業実行中に命綱を放せ」と解釈されてしまった)。あるいは、別の原因でそれが起きた(たとえば隕石が命綱を切断したのかもしれない)。EVAは軌道モジュールからおこなわれ、軌道モジュールは大気圏再突入に際して破壊されるので、残念ながらこの点は確認することができない。あるいは、乗組員の精神的あるいは肉体的な突然の異常。自殺の可能性だって、除外するわけにはゆかない。最後に、犬が暴力的な反応をしめし、パイロットの不意について襲いかかった。なにしろ異種混成EVAは、これがはじめてなのだ……」

「……ひいては、何者かによる誘拐の可能性も、考慮に入れなくてはならない。あまりにおとぎ話じみている、あるいは頭がおかしいと思われるかもしれないし、実際自分でもおかしいと思う。けれども、われわれが夢物語だと思ったものが、やがては予言的だったとわかることも、よくある。可能なるものとは一つの誘惑=試練であり、現実はずねに最後にはそれを受け入れるということを思い出そう。第一、ラドンがレーダーから間欠的に姿を消していったということが尋常ではない。それはつまり、われわれのレーダーが何度にもわたって切れ切れに遮断されていたということを意味する。カドックに送りこまれた自殺衛星(探測機)だって、星の側からは攻撃と見なされる可能性がある。あの奇妙な隕石は、あるいはこちらからのこの攻撃的行為に対する返答だったのだ。スタニスワフ・レムが惑星ソラリスで思考する大洋を構想したことを思えば、反応する小惑星の可能性を考えたらいいのではないか? 地球のそれとは別の生命形態・知性形態の可能性を、受け入れるべきではないか? われわれはあまりに単純に空飛ぶ「円盤」と呼んでしまっているが、地球を訪れる宇宙船(「船」と呼んでよければ)が地質学的な形状をしていたり、不定形である可能性だってあるのだ。それならば、細長い小惑星以上に、うまいカムフラージュがあるものだろ

うか?」

この文書の発見は、私たちに強い衝撃を与えた。発見は1995年6月25日のことだった。ペレゴヴォイにインタビューしなくてはならないと考えた。彼は気乗りがしないようだったが、とにかく7月1日に会おうと約束をとりつけた。だがペレゴヴォイは1995年6月30日に亡くなり、私たちは結局彼には会えずじまいだった。それがはたして単なる偶然だったのかどうかは、もはや永久にわからない。』



ロシアで黒丸UFO、ビデオに撮影か?

日本TV「衝撃レポート」が投じた波紋と考察

2002年10月3日午後7時から日本テレビ系(関西では読売テレビ)で放映された「衝撃レポート!!世界の怪奇現象・大追跡SPⅡ」の中で、今年ロシアでビデオ撮影されたというUFO映像が公開され、UFO関係者の間で、その真偽などについて話題となった。

■テレビ放映の内容から

UFO映像が撮影された「シアリア村」は、1999年にもUFOが撮影され、日本で公開されている。それは、空飛ぶ円盤の形をし、焦点があつたり合わなかったりを繰り返して上空を飛行した。

テレビによると「シアリア村」とは、ロシア、スベルドロフスク州にあり、ウラル山脈のふもとだという。

撮影者はウラディスラフ・ルカニンという地元の新聞社に勤める19才の青年で、2002年6月3日月曜日、村はずれにある××杉?(ナレーション聞き取りにくい)をビデオで撮影するために現場に来た。そして、めずらしいその木を撮影しようとしたとき、不思議なものを見つけてそれを録画した。

青年が再現シーンで手にしていたのはSONYの6倍パスポートサイズ。しかし、本人の顔で撮影に関する説明を語る場面はなかった。

青年が見つめて撮影したのは、草原に出来た円いくぼみだった。さらに、××杉を撮影していた時、西の空に不思議な物体が見えた。西の空にカメラを向けたが、その物体は瞬時に消えてしまった。空は雲に覆われてはいるが、上空はすぐ背後に青空がありそうな薄い雲に見える。

そして10分ほどたったとき、それは再び現われた。突然現われた謎の物体、画面は最初、何もない空を捜している状態で、約5秒後に黒い丸い物体の滞空状態が映る。

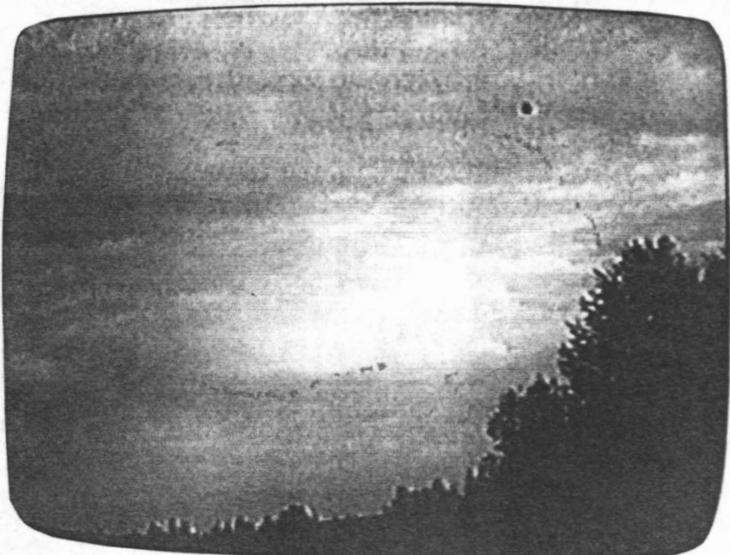
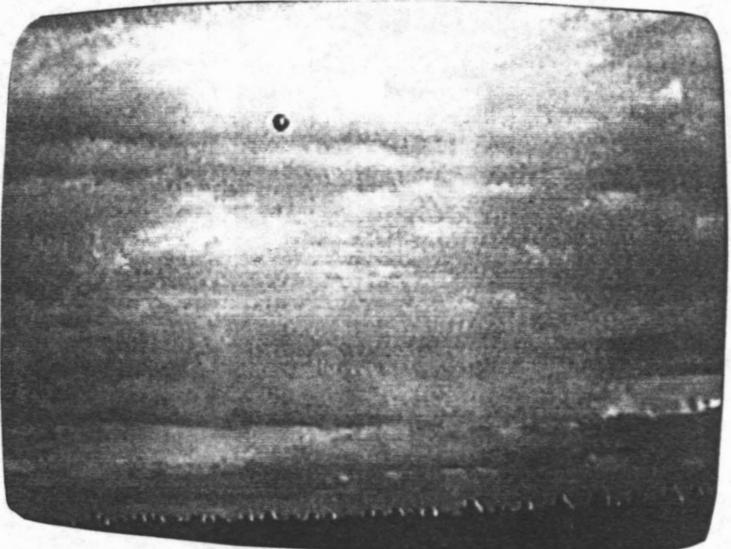
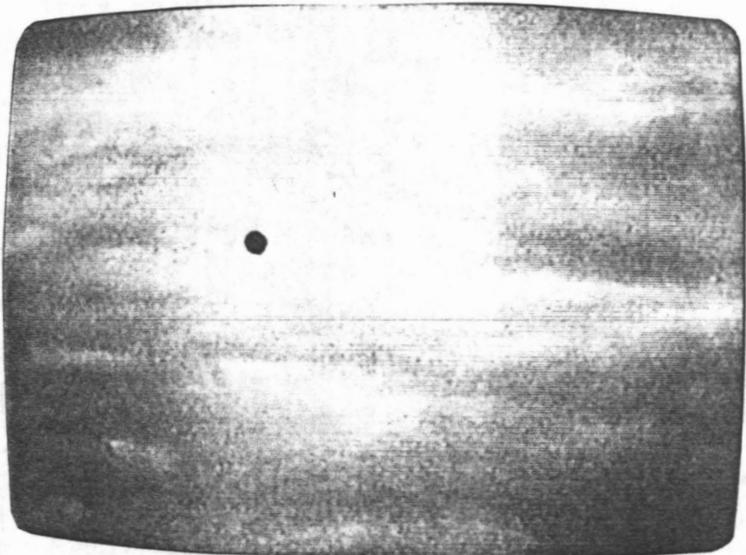
その物体は、約25秒ほど静止状態。その後、白い雲のすき間?の左から右へと位置を変える。そして上下に揺れはじめる。

テレビ局取材が得た情報によると、そこはペルメにまたがる怪奇地帯。(地図にはPerm'ペルミとある)センターと呼ばれる地区では、毎晩のように発光物体が出現しているという。

超常現象家エミール・パチューリンは「我々はその一帯をゾーンと呼んでいる。ゾーンには磁石の方位が狂ってしまう場所もある。別な世界とのコンタクトがツネに行われている地点といえるだろう」と語る。

ゾーンはシアリア村から車で5時間の場所にあるという。

ZONEでは、1995年ワレーリ・ヤキモフが赤い球体の撮影に成功している。ぼんやりとした光を放ちながら、森の中を漂っている。目撃者本人によると、大きさはバスケットボールほどだという。



■黒丸物体の見かけの大きさ

編者はテレビ放映画面の録画に失敗(チャンネル設定間違い)したため、鹿角UFO研究会の駒ヶ嶺政也氏より録画のダビングテープを送ってもらった。そのテープを再生し、主要な画面を36コマ写真に撮った。そのプリントをもとに、見かけの大きさを考えてみる。

まず、そのための仮定として、撮影機種が再現シーンで使われたソニーの6倍ズームのパスポートサイズで、テレコンバージョンなしの「最大6倍」と仮定した場合である。撮影者が画面の中で「もうこれ以上ズームはできない」と言っている倍率を6倍とした。

6倍ズームは35ミリカメラに換算すると、300mmに近い画角となるので、おおざっぱではあるが、その画面の視野を「 $6^{\circ} 50' \times 4^{\circ} 30'$ 」として、その視野に占める物体の視直径を求めてみた。

まず $6^{\circ} 50'$ を分にして計算しやすくする。 1° は $60'$ だから、 $6^{\circ} 50'$ は $410'$ になる。そして、画面を撮影してプリントにした時の、モニター画面の横軸の長さを計ると96mmで、黒丸物体の最大の大きさはプリント上で3mmであった。それで「 $410:x=96:3$ 」という比例計算をしてみると、

xの値は12.8125になった。単位は分だから、 $12.8'$ ということになる。月の視直径が $50'$ だから、この物体が最も大きく見えたときの見かけの大きさは、月の約 $1/4$ 分であったということになる。

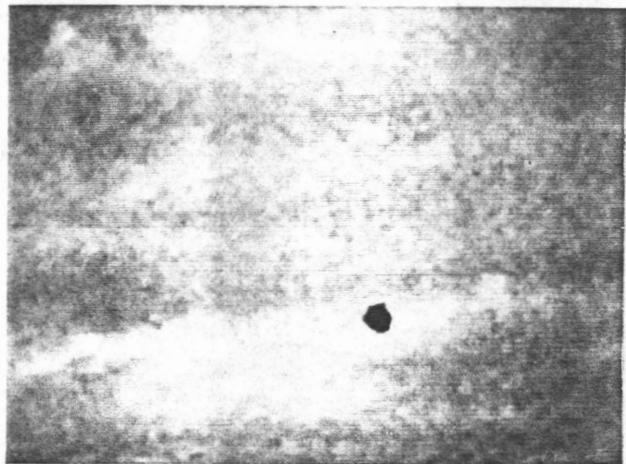
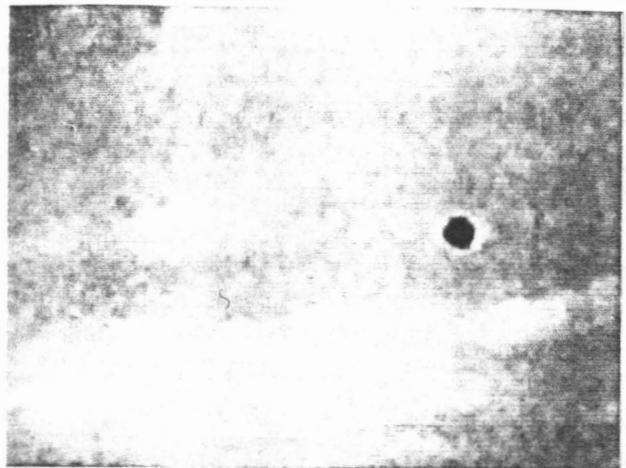
■黒丸物体の動きと特徴

物体が雲を背景に動く画面を一見すると、なんだか人がカメラの背後で、竿の先のピアノ線に着けた黒玉を上下させたり、格好良くさっと横に動かしているような作為的な印象を受けてしまう。つまりいかにも「これがUFOの動きだ!」と宣伝するような「安易なUFO観を持つ個性」の意思を感じてしまう。それはそれで印象なのだから仕方がない。

まず目につくのは、黒丸の周辺にみられる白い輪郭である。編者が1991年9月29日に家族と共に観察した黒丸物体を撮影中、思わず言った「ハローが取り巻いているよ」という言葉。そのままの姿がここにも見られた。これが実に「UFO的」であるので、「作為」の疑念を晴らさなくてはならない義務感を生ずる。その白い輪郭は、いわゆる「UFO独特のフォースフィールド」と呼ばれてきたそれを思わせる。この部分は、接近している時よりも遠ざかった、あるいはカメラを引いて広角にしたときのほうが、「太く」見える。輝くコロナを背景にした黒い太陽を思わせる。

そして、黒い物体にもかかわらず、反射によるのか、別な原因によるのか、中央に白い部分が見られる。画面下に見える木立はシルエットに近い黒黒とした感じで、曇り空のゆえのか?と思われるが、物体の見えた方位が西だ、というだけでは、撮影時刻も定かではなく、太陽の位置を知るには情報不足である。それでも、この白い部分が時によっては消失して全体が黒くなることもあり、これが映像の解像度の問題か、黒い物体自体の変化か、注目される点であると、編者は考える。

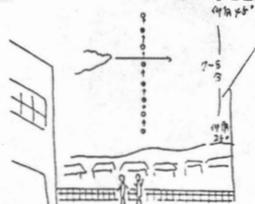
なぜかという、編者と妻は、最初黒丸物体であったものが、右中央に白い部分が発生し、次第にその面積が大きくなって、最後は全体が白丸になる、という現象を見ているからである。これは1993年10月1日午後12時40分、編者夫婦の勤める小山産業の敷地で同僚2人と共に目撃した。



この白い部分は、そのときに見た、最初の時によく似ている。したがって、これは反射ではなく、物体の周囲を取り巻く変化自在の「場」の、「見え方」かも知れない可能性をもっている。

垂直微動上昇し変化する球体の観察

1993年10月1日午後12時40分すぎ、私は勤め先の小山産業株式会社のIFC操作室近くの、机の近くで椅子にもたれて食後の仮眠休憩中であつた。「消さん!」という声で目を覚ますと、妻が大きな声で「カメラかビデオもってきてるか?」と聞くので「いや持っていない」と言う、「白くなったり黒くなったりしている!」と言うので、急いで妻の後に続いて外に出た。工場の西端にある建物と建物の間から、西の空を見る。空は快晴で高い雲が少し見える。「あの電線の上だ!」と言うので、その方を見ると黒い球状物体が見えた。



印象に残る変化

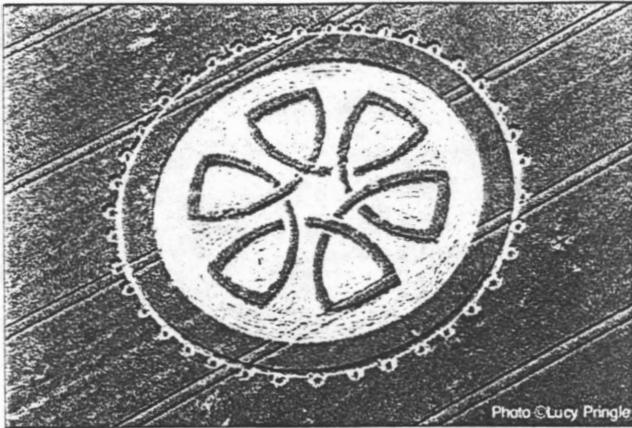


2002年英国クロップサークル紹介

2002年も英国に「ミステリーサークル」が現われた。この現象、宇宙に呼びかけるための英国紳士による密かな農場芸術か、UFOによる宇宙人からのメッセージかで、世間も研究者も揺れている。最近は後者に立つほうが有利である。つまり人間側の製作者は製作過程を語ることが出来るからである。1つでも語られれば、他のサークルも同様だろう、ということで個人的レベルでの決着がつく。これに対して「未知の製作者によるもの」があったとしても、彼らは決して姿を見せないだろうし、口も開かないだろうから、「未知なるもの」の認定とは我々見学者個々の見識にゆだねられる。

さて、2002年度の英国クロップサークルに「未知なる製作者」の手になるものが隠れているだろうか...? 読者の皆さんにご判断いただく。これらの情報を提供してくれたH氏に感謝。

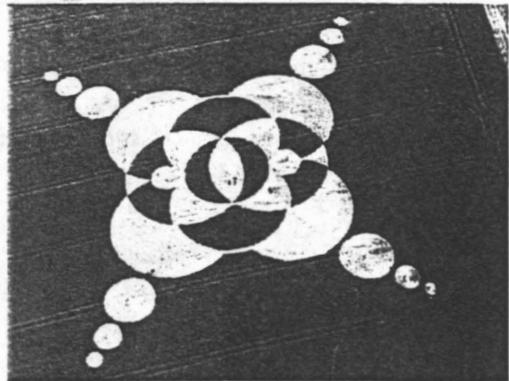
2002年6月2日 Avebury Trusioe, Wiltshire



A kind of celtic knot design with a 'looping' ring around it.

Photo ©Lucy Pringle

2002年6月4日 Silbury Hill, nr Avebury, Wiltshire

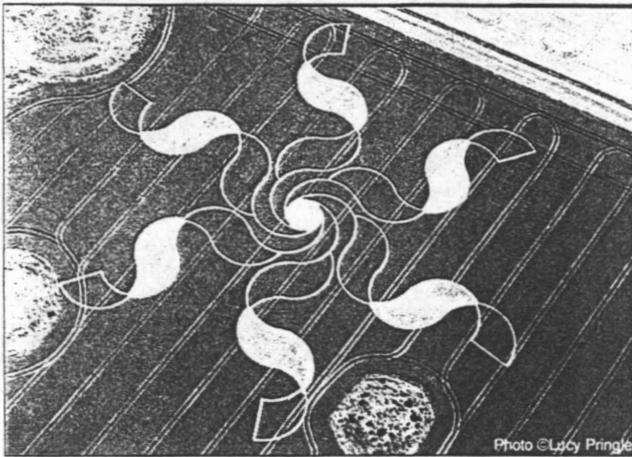


2002年6月23日 West Overton, Wiltshire



Located opposite the Bell Inn, along the A4, this design consists of a double spiral design.

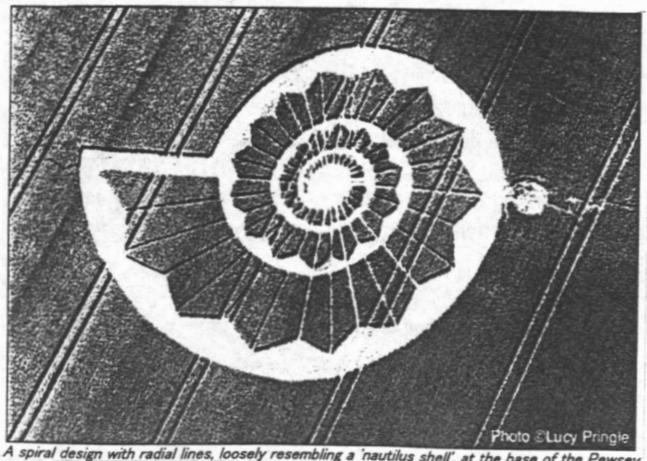
2002年7月4日 Stonehenge, Wiltshire



It comprises a six-fold pattern resembling 'ribbons' blowing in the wind.

Photo ©Lucy Pringle

2002年7月16日 Pewsey, Wiltshire



A spiral design with radial lines, loosely resembling a 'nautilus shell', at the base of the Pewsey

Photo ©Lucy Pringle

2002年7月15日 Sharpenhoe Clappers, nr Luton, Bedfordshire

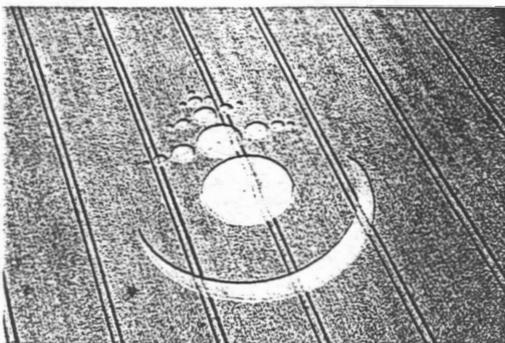


Image Andrew King Copyright 2002

2002年7月22日 Alton Barnes, Wiltshire

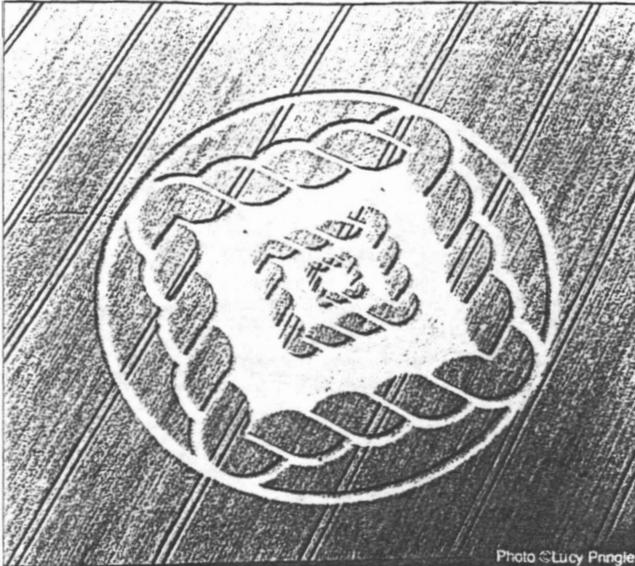


Photo ©Lucy Pringle
A large formation resembling rope knotting in a three iteration, four-fold geometrical design.

2002年7月26日 Ivinghoe Beacon,



2002年7月28日 Avebury, Wiltshire

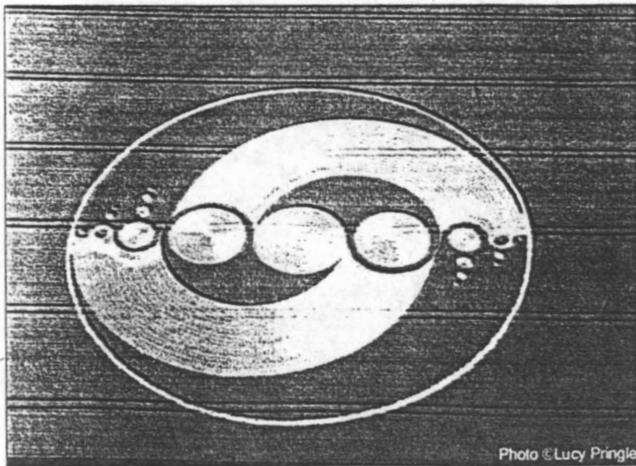


Photo ©Lucy Pringle
A large design consisting of several circles and semi-circular paths giving a kind of nested 'comet' type design.

2002年7月25日 Barbury Castle, Wiltshire

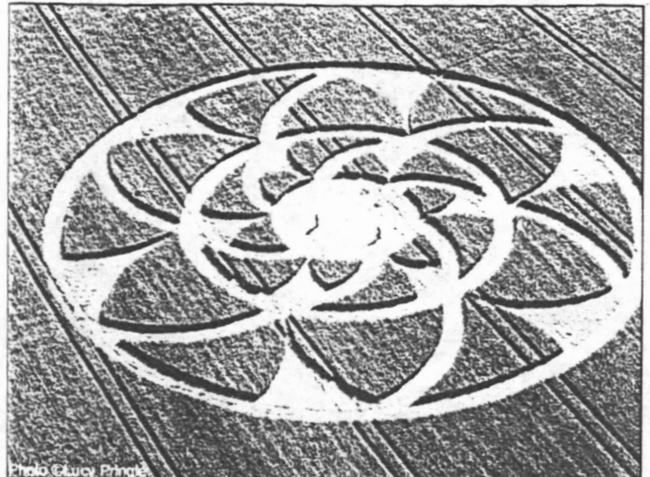


Photo ©Lucy Pringle
A flower type design, based on six fold geometry with six regular petals interspaced with six angular petals and based on two iterations within a circular design.

2002年7月28日 Cherhill Down, Wiltshire

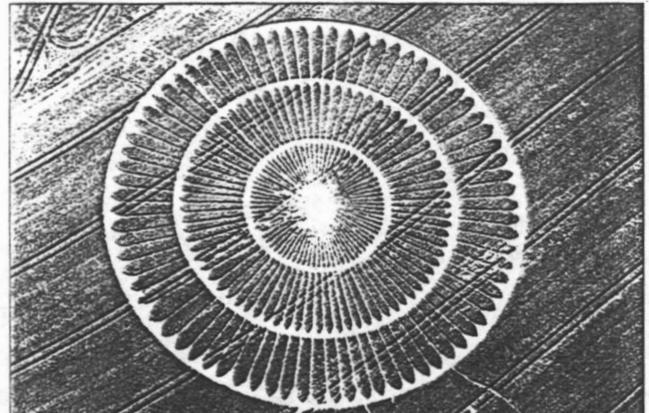


Photo ©Lucy Pringle
An elaborate spoked design consisting of two rings of radial lines coming out from a central circle

2002年8月11日 Etchilhampton, Wiltshire

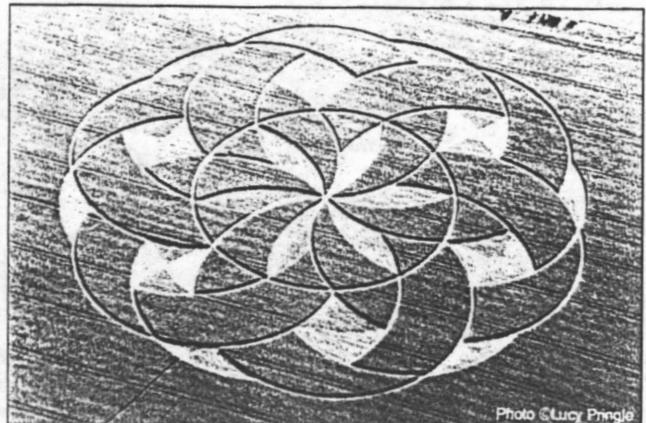


Photo ©Lucy Pringle
A large mandala style formation.

非公開のUFO報告書をウェブに全面掲載へ 英政府

2002.11.30 Web posted at: 18:20 JST

- REUTERS/CNN

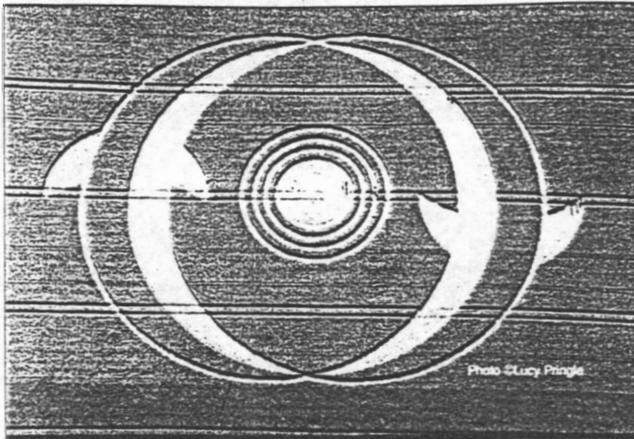
ロンドン—英国政府は28日、同国防省のウェブサイト、未確認飛行物体(UFO)の目撃などについて記した非公開報告書を近く掲載すると発表した。情報公開についての法律改革の一環で、国民の知る権利を拡大するための措置としている。

報告書には、英東部サフォーク州にある英空軍基地近くの森で1980年12月、まぶしく光る宇宙船が着陸するのを2日連続で目撃したとする米軍将校らの証言内容などが含まれている。この証言については、近くの海岸沿いにある灯台の光と見間違えたのではとの否定的な意見も出ていた。

これらのUFO文書はこれまで、国防省の許可なしで閲覧(えつらん)することは出来ず、約20人のみが申請、認められていた。今後はさまざまな報告書をインターネット上で自由に読むことが可能になる。

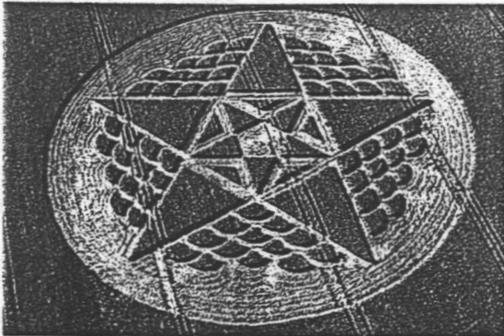
英政府は2000年に新たな情報公開法を制定、旧法にあった約1000項目の廃棄や是正を目指した。

2002年8月12日 Alton Barnes, Wiltshire

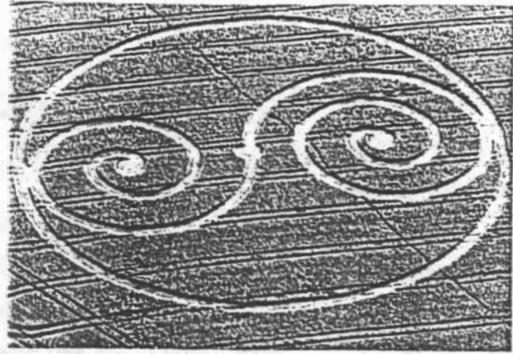


A large, ringed design approx 260' across and consisting of two outer rings that bisect each other and inside are three rings with a centre circle with two centres inside it. Resembling a 'dolphin'

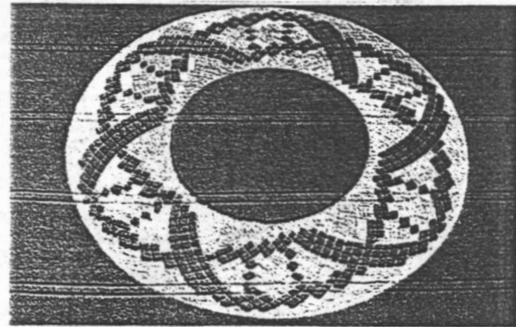
2002年8月26日 Buckhampton, nr Avebury, Wiltshire



2002年8月18日 The Ridgeway(1), nr Avebury, Wiltshire



2002年8月28日 Crooked Soley, nr Hungerford, Wiltshire



台灣飛碟學研究會の活動と理事諸先生近影
-同会では古代ピラミッド遺跡を団体で訪問した-



大家在青島自然中心門口合影。



中国UFO研究会創立者 UFO研究事業開拓者の一人 高原氏逝去

訃告



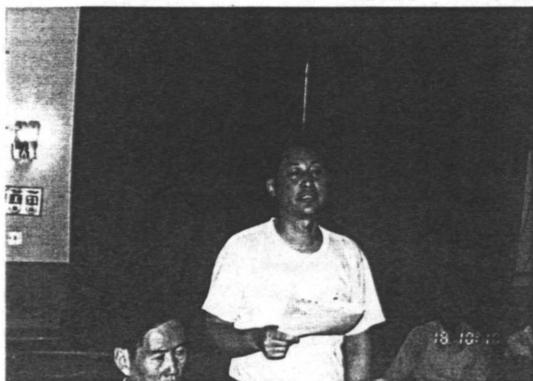
現在は中国気功研究会の分会となっている、前「中国UFO研究会」の創設者の一人である北京在住の高原氏が癌のため亡くなった。

享年は54才。同じ昨年に日本で亡くなった池田隆雄氏、高坂和導氏とほぼ同じ年代で、活躍盛りであった。ここに地球を一単位としたUFO研究同志に対して哀悼の意を表する次第である。

編者は1994年の「94年亜太地区UFO資料展示学術交流会」の会議の席で通訳の陳百海氏より、高原氏を紹介された。また、彼が力強い声で声明を読み上げる姿を写真に収めた。

UFO研究の歴史は浅い。多くの研究者がそれぞれの得意分野を長い年かけて取り組まなければならない。それだけに働き盛りの同志を失うのは、大きな地球的損失である。

なお、高原氏の写真は大小3枚、中国UFO研究中心の程伯年氏より送られたものの中から一点を選んだ。この訃報は山西省UFO研究会の機関誌にも大きく取り上げられている。高原氏の存在がきわめて大きかったからであろう。



■1994年8月、北京で開催された94年亜太地区UFO資料展示学術交流会で声明を読み上げる高原氏。(編者撮影)

中国UFO研究会の缔造者、中国UFO研究事業の開拓者、北京UFO研究会の奠基人、原中国UFO研究会常务理事、副理事长高原同志，因患癌症医治无效，于2002年7月26日14时在北京去世，享年54岁。

高原同志早期积极从事中国UFO研究组织的筹建工作。1979年9月，中国UFO爱好者联络处在武汉大学成立，高原作为联络处成员，受命组建北京UFO研究小组，并负责华北各省研究小组的联络工作。1980年5月，联络处更名为中国UFO研究协会，高原为协会会员之一。1981年3月，中国UFO研究协会在武汉大学召开第一次全国代表大会。1983年8月，中国UFO研究协会在上海召开第二次全国代表大会，同时正式更名为中国UFO研究会，高原作为北京代表团出席会议，被选为第二届理事会理事、常务理事、副秘书长，负责组织工作，同时还兼任北京UFO研究会（筹）的总负责人。1986年8月，中国UFO研究会在长春召开第三次全国代表大会，高原被选为第三届理事会理事、常务理事、组织委员会主任。1992年5月，中国UFO研究会在北京召开第四次全国代表大会，高原当选为第四届理事会理事、常务理事、副理事长，同时兼任组织委员会主任。

二十三年来，中国UFO研究组织的成长壮大，倾注了高原同志的一腔心血；中国UFO研究事业的发展进步，离不开高原同志的无私奉献。他以卓越的组织才干，为UFO研究事业培育出一批中坚力量，保证了事业后继有人。他敢于坚持原则，坚定不移地支持正确的学术研究方向，体现了对事业光明磊落的忠诚信仰，为后人树立了做人的楷模。二十三年来，中国UFO研究会的每一次重大活动中，都留着他任劳任怨的身影；中国UFO研究的每一份业绩里，都凝结着他勤勉务实的汗水。他为北京UFO研究会的创立、发展，直至完成社团登记，作出了不可替代的贡献。为了提高社会大众对UFO的认知度，他殚精竭虑地工作到最后一息。就在他身患绝症，自知生命无多的有限时间里，仍为UFO知识的普及呕心沥血；临终之际仍念念不忘UFO资料的整理交接……。

高原同志英年早逝，是中国UFO研究事业的重大损失，令我等同仁扼腕悲恸！

安息吧！高原同志，你未尽的事业，我们一定继承！

中国UFO研究会
中国UFO研究资料中心
二〇〇二年八月一日

■2002年8月20~24日
世界華人UFO聯合會
第1回UFO科學シンポジウム
大連市で開催
內蒙古UFO研究會の
劉成義氏から発表論文届く

『太陽的刮刀-阿爾法磁譜儀-磁譜儀的負作用』と題された劉成義氏の論文は、タイトルからしてその意味がつかみにくい、太陽から来る磁氣的な力、天体の磁場、それらが地球環境に及ぼす影響について述べたものと推察される。

■山西省UFO研究会機関誌『飛碟(空飛ぶ円盤)』に編者が紹介される

大原理工大学劉鳳君教授が理事長を務める同UFO研究会は、度々編者の寄稿を中文に翻訳して掲載してきたが、2002年2月16日号に編者のこれまでの歩みを掲載。

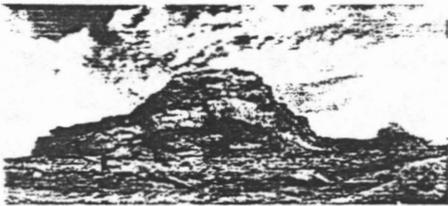
■中国UFO研究中心からの情報

程伯年氏より新聞報道、インターネット情報が定期的に送られてきている。
最近では航空機とUFOの遭遇事件を集めた資料も届いているが、編者の力不足により翻訳する時間がなく、原文のままファイルされている。以下は珍しい情報。

■「外星人遺跡」!!!?

さ 青海省海西蒙古族藏族自治州首府德令哈市西南40数公里にあるという。

■北京の地質専門家が認めた青海“外星人遺跡”からは、第三紀砂岩から“鉄管”が発掘された



青海省内外媒体炒作得沸沸扬扬并引起广泛争议的青海“外星人遗址”能否揭开它神秘的面纱?近日,由人民日报和北京 UFO 研究会共同主办,国家气象局、航天部、科技部、国家天文局以及全国近 10 家新闻单位共同参与的大型综合考察活动即将开始,本报特派记者已于 6 月 21 日先期抵达柴达木盆地北翼,对这一举世闻名的遗址和探察研究活动进行追踪采访。

号称中国四大盆地之一的柴达木,位于青藏高原的东北部,北依连绵不绝祁连山,西接阿尔金山,南屏昆仑山和唐古拉山系,总面积为 32 万平方公里,柴达木盆地在亿万年前曾是一片汪洋大海,欧亚板块的漂移,喜马拉雅山脉的隆起,造就了群山环绕的高原盆地,八百里瀚海以及茫茫草原曾是西羌的牧地,吐蕃古国的中兴之地,吐蕃政权的广袤疆域,“西蒙古”和喀喇汗国始汗统一青藏高原的腹地,也是通往西域的“丝绸之路”的著名通商。这里冰峰耸立,地势高峻,河流纵横,碧湖点缀。

坚实的足迹 勾勒着大写的人生

记日本UFO研究专家天宮清先生



几十年来,天宮清先生以孜孜不倦的精神在 UFO 研究领域内做了大量的实实在在的开拓性工作,被誉为日本 UFO 研究专家。天宮清先生也是中国 UFO 研究界的老朋友。他被中国不明飞行物研究会、中华飞碟学研究会聘为顾问,被中国 UFO 研究会、山西省 UFO 研究会、甘肃省 UFO 研究会聘为高级顾问。1993 年应邀赴台湾参加《中华不明飞行物科学学会》成立大会,1994 年应邀赴北京参加《94 年亚太地区 UFO 资料展示学术交流会》。

天宮清先生 1944 年出生于日本神奈川县。1963 年至 1966 年期间,对日本国内 UFO 目击报告进行了统计分类 (IFO 和 UFO)。在此期间 (1964 年至 1966 年)曾担任《飞碟概要》杂志编辑。1966 年在日本东京上学时,加入了日本 UFO 民间研究团体 CBA (宇宙友好协会)。1975 年迁入天理市。1989 年自费创刊《UFO 研究者》(The UFO Researcher) 杂志。1993 年自费编辑发行了《探索地球外的智能信息》(地球外知性痕迹探索)文集。

天宮清先生几十年来把业余时间几乎全部用在了 UFO 研究方面。1967 年他对月球表面

出现的奇异现象进行了观测分析,1970 年对日本纪伊半岛古代遗迹进行了考察,1982 年—1989 年对九州八代湾出现的神秘火光现象进行了考察;1975 年—1998 年对天理市上空出现的 UFO 现象进行了摄影分析。天宮清先生很重视实地考察,为了对古代遗迹进行研究,从 1983 年开始,他先后到印度、尼泊尔、雅加达、埃及、埃塞俄比亚、苏丹、英国等国进行考察访问。

天宮清先生撰写的主要论文有:《天理市的 UFO 活动》(日本《飞碟现象》No.2.1992);《UFO 活动状态一览表》(中国《飞碟探索》No.5.1992);《IFO 与 UFO》(台湾《飞碟科学》创刊号 1994);《日本神秘的作物圈》(波兰《NIEZNANY SWIAT》7 月.2000);《Nobunaga Oda 和作物圈》(台湾《飞碟探索》No.11.2001);《火光之谜——对其观测经验方面的研究》(日本《飞碟现象》No.3.1993);《传说中的古代空中机械和乘坐者》(日本《月刊 HI GENK》No.27—30.1992)等。

天宮清先生迈着坚实的步伐,在 UFO 研究的道路上已踏上了第四十二个年头。他对目击报告的认真分析、综合研究、对 UFO 学科的普及宣传等方面洒下的汗水、付出的心血,正浇灌着茁壮成长的 UFO 学科,谱写着他那辉煌灿烂的大写人生!

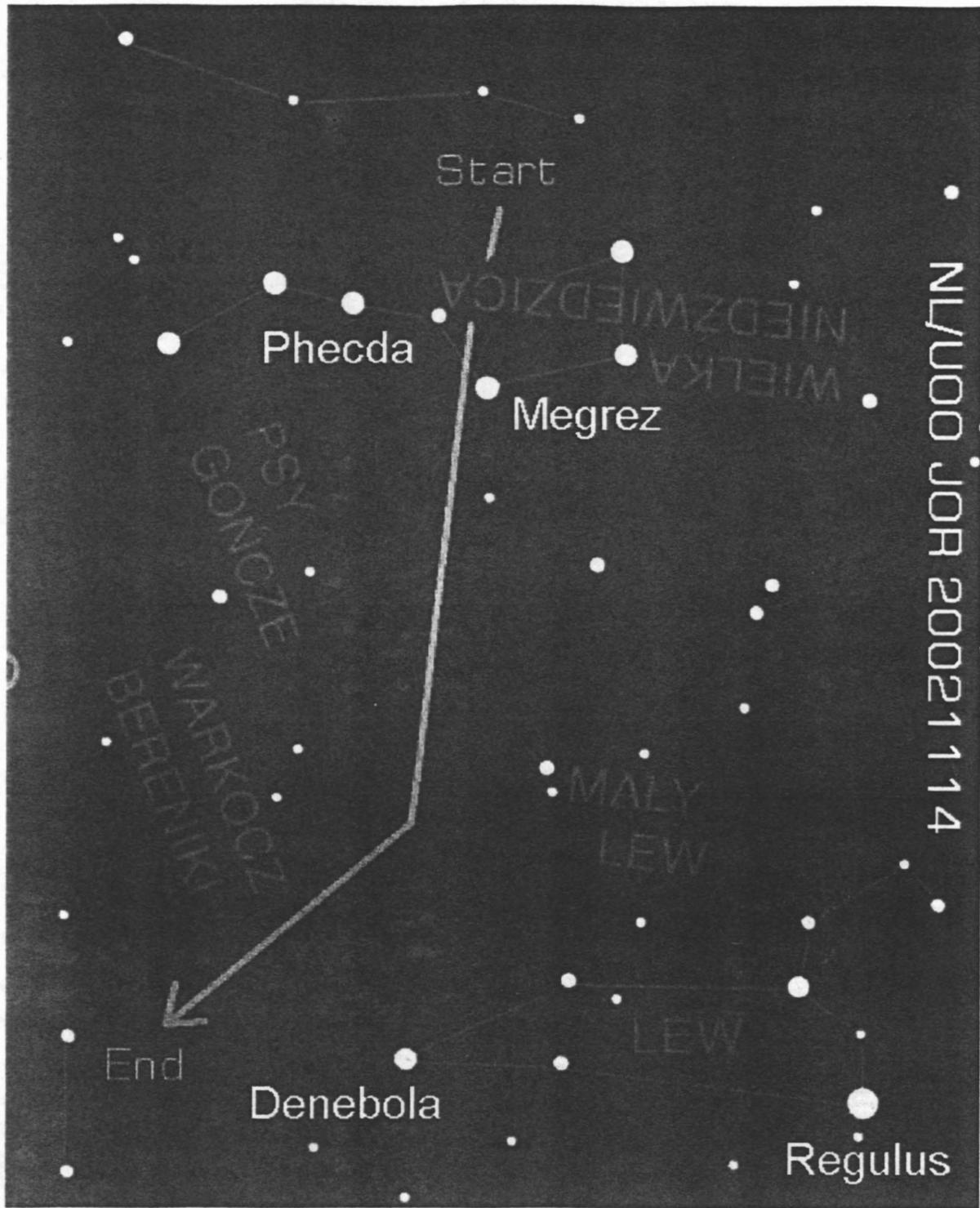
(刘凤君 赵济民)

吐蕃部落群、诺木洪文化遗址,可可西里自然保护区的神秘岩画、石经岩画石刻以及西王母神话所显示的文化神韵无不散发出迷人的光彩,这其中,尤以白公山下、托素湖畔的“外星人遗址”最具争议性和最神秘难解。

白公山位于青海省海西蒙古族藏族自治州首府德令哈市西南 40 多公里处的怀头他拉乡,它四面被荒漠和沼泽包围,沙漠与戈壁随处可见。在白公山的西南有两座高原湖泊如璀璨明珠镶嵌其上,一座叫托素湖,一座被称为可鲁克湖,令人不可思议的是托素湖为咸水湖,而可鲁克湖为淡水湖,其间有一条叫巴干河的水流相连,但水质泾渭分明。在托素湖的东北角有一座白山,当地人称作白公山,“外星人遗址”和众说纷纭的神秘的铁质管状物就坐落在白公山下的岩洞里。

6 月 22 日下午,记者一行到达白公山湖边时,连续几天罕见的暴雨刚刚过去,高原的烈日和紫外线像雪崩一般地爆发在头顶,把地表的一切都赤裸裸地暴露无遗,呈现在眼前的情形如同一部美国科幻影片所描述的火星表面,火红色的岩石反射着刺目的光线,一簇簇干燥的沙漠植物顽强抵抗着侵袭而来的烈日。这里海拔为 2800 多米,空气已显稀薄,记者走在松软的沙石上,脚下有一种磁吸的感觉,像在太空里失重的宇航员那样,白公山矗立在托素湖畔,已然风化的铁质管状物散落在山岭的表面上,少石的岩层上有一串神秘莫测的符号和未解的字母,黝黑的岩层仿佛一个巨大的问号,这里,真的就是外星人造访地球时留下的遗迹吗?从柴达木盆地目前发现的人类活动的文物资料表明,这一地区的人类最早活动时限可追溯到上万年前,可见的出土文物,远者为骨器、石器、陶器或皮革,近者为青铜器、弓箭、衣物等等,显然也有毛纺织品,但都工艺简单,制作粗糙,在此之前从未有过铁器之类的现代工业产品,加之柴达木盆地自然条件恶劣,人烟稀少,当地民族从未有过成形的工业开发史,调查史书,也从未找到有关此地工业的片言只语的记载。解放以后,国家曾经几次大规模开发过柴达木,但根本未在托素湖周围施工,据当地人回忆,除了白公山北麓偶尔有流动牧民外,这一地带没有任何居民定居过,所以可以肯定这里不可能是古人或现代人的遗址,那么,那些壮观厚重的铁质管状物究竟是谁遗失在这一片荒凉地带的呢? 兰州晨报

UFO SIGTING REPORT



Last night 13/14.XI.2002, at 05:35 - 05:36 hrs (04:35 - 04:36 GMT) in Jordanow (49°38'59"N and 19°50'01"E), Poland, I saw a starlike UFO, which floated in the sky. It came from the North Pole towards S-SE, next it passed between two stars of the Big Bear constellation: Megrez and Phecda. when it was coming to the Hounds constellation, it made a turn towards East and disappeared somewhere in the eastern part of the Lion. The UFO shone with the white light, and its brightness was as big as the Cor Caroli one - +2m,9. I think it could be either a supersonics spy-plane like American Aurora, Russian Uragan or a spysat, which had changed its orbit. The spy-device could go above Iraq to controll its surface, which can have a connection with an actual political situation in that region of the world. On the other hand, I can not exclude a possibility that I saw the "ordinary" UFO - steered and controlled by Aliens from outer space...

Do you have any UFO sightings in your countries? If so, please inform me about them - OK.?

Robert K. Lesniakiewicz

Vice-coordinator of the Center for the UFO and Anomalous Phenomena Researches in Cracow

2002年11月14日、ポーランドのロベルタ・リシェニキェビッチ氏が北斗七星から獅子座方向に移動し、獅子座の手前で曲がった白色星状光体の経路を示す。彼はこれを「UOO」未確認軌道物体と呼んでいる。

郡聡さんのUFO体験から

「矢追さんのUFO特番を見ていて、急に“UFOが見える”と思い
家族全員でベランダに出たら、本当にUFOが出現していた!!」

■UFO目撃撮影者郡聡氏との懇談

2002年6月29日午後5時半に会社から帰宅した私は、5時49分発の近鉄電車で京都に向かい、京都6時50分発の「ひかり170号」に飛び乗って、午後9時33分、東京駅に着いた。

10時過ぎ、予約しておいた池袋駅近くの「ホテルオーエド」にチェックインし、寝ながら講演予定の内容を再度吟味した。何とか「これでゆこう」と落ち着いたのは午前3時頃に目覚めた時である。

午前7時半少し前に、私は身支度を整えてチェックアウトを済ませ、ロビーにて郡聡氏を待った。彼がUFOを目撃し撮影をする人として知ったのは、今年3月頃、彼のホームページを見てからである。

約束の時刻ちょうどに彼は現われた。郡氏は私よりずっと若く、44才。穏和で有能な実業家、という印象であった。名刺を交換し、いくつか質問のあと、彼が持参した撮影下UFO写真と目撃図のプリントアウトした画像を戴く。それを見ながら彼の説明を聞き、要点をプリントの余白に記入した。彼が有名なUFOディレクター矢追純一氏と親しいと知って、驚いた。家族と共に目撃した状況を話してもらい、それを録画した。私の話に率直に同意し、また共通体験的な現象に納得されていた。彼の顔写真も撮らせて戴き、8時半近くになったので、彼の運転するベンツで池袋駅に向かった。

以下に、対談の録画から、UFO番組を家族と見ていて、UFOが自宅上空に出現している、と確信し、家族と共にそれを目撃するという、きわめて異例だが、起りえる事例の体験を紹介する。郡氏「学生の時なんですけど、両親と弟と4人でテレビを見てたんです。

天宮「どんな番組立ったのですか?」

郡氏「矢追さんの番組だったです。」

天宮「11PM?...?」

郡氏「じゃなくて、UFO特番です。」

天宮「あ、なるほどね」

郡氏「で、それを見ていたときに...どんなタイミングか忘れてしまったんですけど、“まちがいがなく、うちの家の上にいる...”という風を感じたんで、それで4人でベランダに出て...」

天宮「皆さんにお知らせしたんでしょ」

郡氏「言いました。父と母と弟に。“いま、上にいるから、皆で見に行こう”“コマーシャルの間に見に行こう”って。で、4人でベランダに上がって...窓あけたら真上にいるんですよね。かなり大きなものが...」

天宮「形はどんなものですか?」

郡氏「形は楕円というか、こんな感じだったんでと思うんですよ。(郡氏は手で形をつくる)」

天宮「あなるほど。で色はどうでしたか?」

郡氏「えーと、白色の光体で、父が双眼鏡を持ってきて見たら、下に緑と赤の光でなにか回っているように見える、って言うんです。」

天宮「ほーう」

郡氏「なんて言うんですかね、でんぐりがえししてるみたいに...(郡氏は手で再現する。)」

天宮「うーん、全体がね...」

郡氏「全体が...。私は肉眼だったんで、白いのしか見えなかったんですが、父ははっきり見えたって。それで形も見えた。母は“変なもの見ちゃった”と。」

天宮「それはずっと停止して...?」

郡氏「えー動いてました。最初止まってたんですけど、私らが見に来たら、もう動き出しました。それで、はるか西のほうに行ってしまったんですけど。」

天宮「よくありますね。目撃者が確認するまで、じっと止まっているという...」

郡氏「そんな感じなんです」

...以上の体験は、郡氏のホームページ「不思議な体験」の「The wonder of a day」のUFO目撃一覧表に記載されている。

「1年月日:979年7月。体験場所:練馬区石神井台。ベランダから両親・弟一家全員で見る。4人で目撃。(父は双眼鏡で物体の下がクルクル回り色を変えているのをハッキリ目撃。年齢:22才)」

この目撃は、郡氏が1972年に初めてUFOを目撃してから9回目のもの。編者も多数のUFOを見ているが、初期の頃、母親と一緒に見るという機会はなかった。

また、非常に素晴らしいのは、お父上が、双眼鏡を用意し、それで観察したということである。また、郡聡氏が家族に「いま上にUFOが来ている」と言っても、「そんなこと、ありっこない」と言って、信用せず、郡氏一人だけがベランダで見る、ということも十分起りえることであった。しかし、ご両親と弟さんは、「何か見えるかも知れない」という期待感か、ご両親にしてみれば「息子がそう言うのなら、何かあるのだろう」という信頼感があつたと想像する。

■UFO目撃の不思議

また、「窓を開けたら、そこにUFOがいる」という確信や、目で見えないのに、「UFOが接近してきた」という体験は、編者の関係者や知人から聞いたことがある。UFOから何か特殊な力が放たれていて、それを身体の何かの器官がキャッチし、心の中に確信を起させるものらしい。

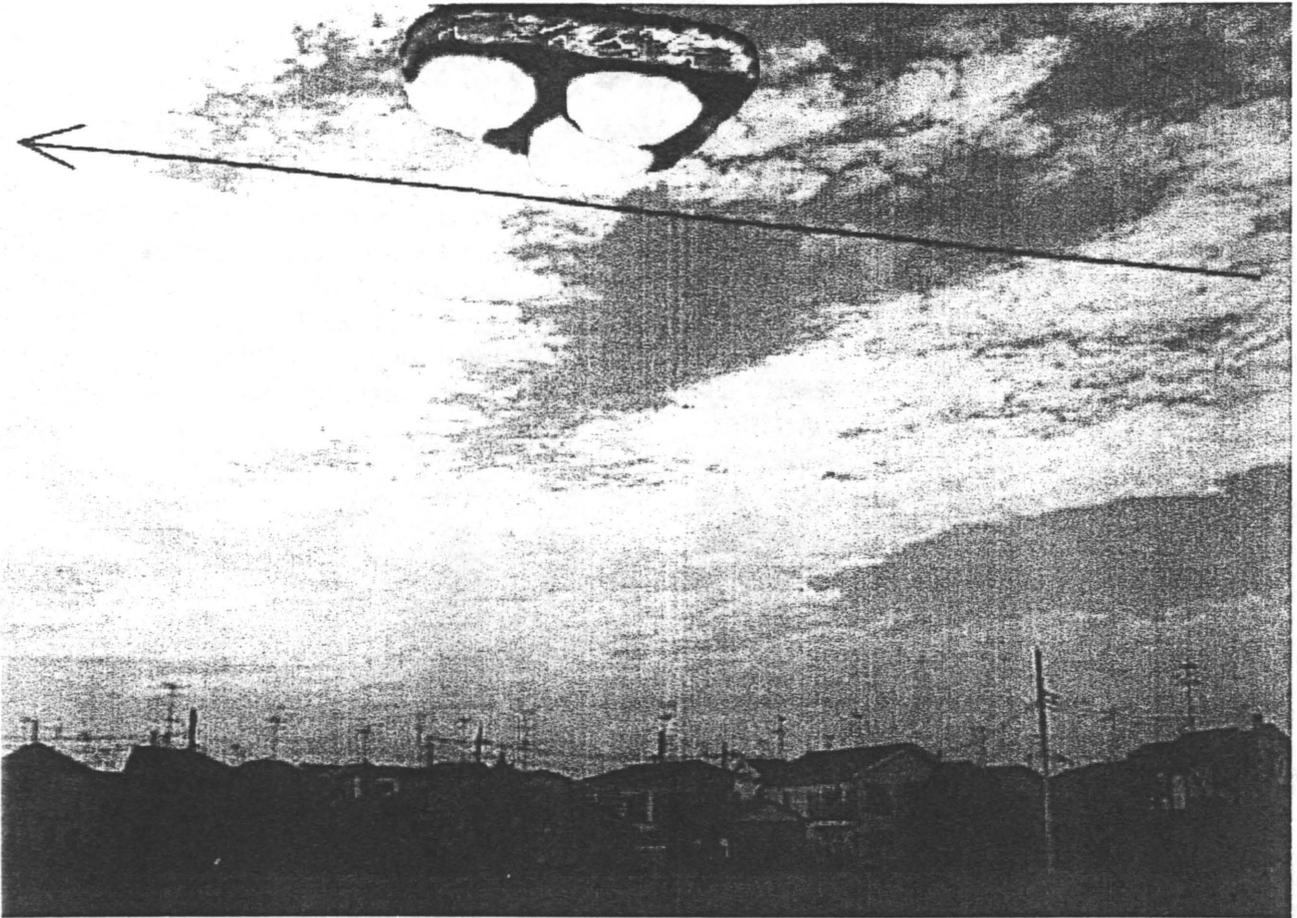
いわゆる「精神UFO目撃」と決定的に違うのは、そうした状況におけるUFOとは、客観的に第三者にも見える「実体」として空にあることである。それを写真に撮れば写るだろうし、ビデオに撮れば映像として残る。郡氏は、それを実際に行っており、多数の写真と映像を記録しておられる。

彼が言うのには「自分はUFO研究者ではない。UFOの本も自宅にない」とのこと。従来「UFOに興味がある人が、多くのUFOを目撃する」という例には含まれないようである。

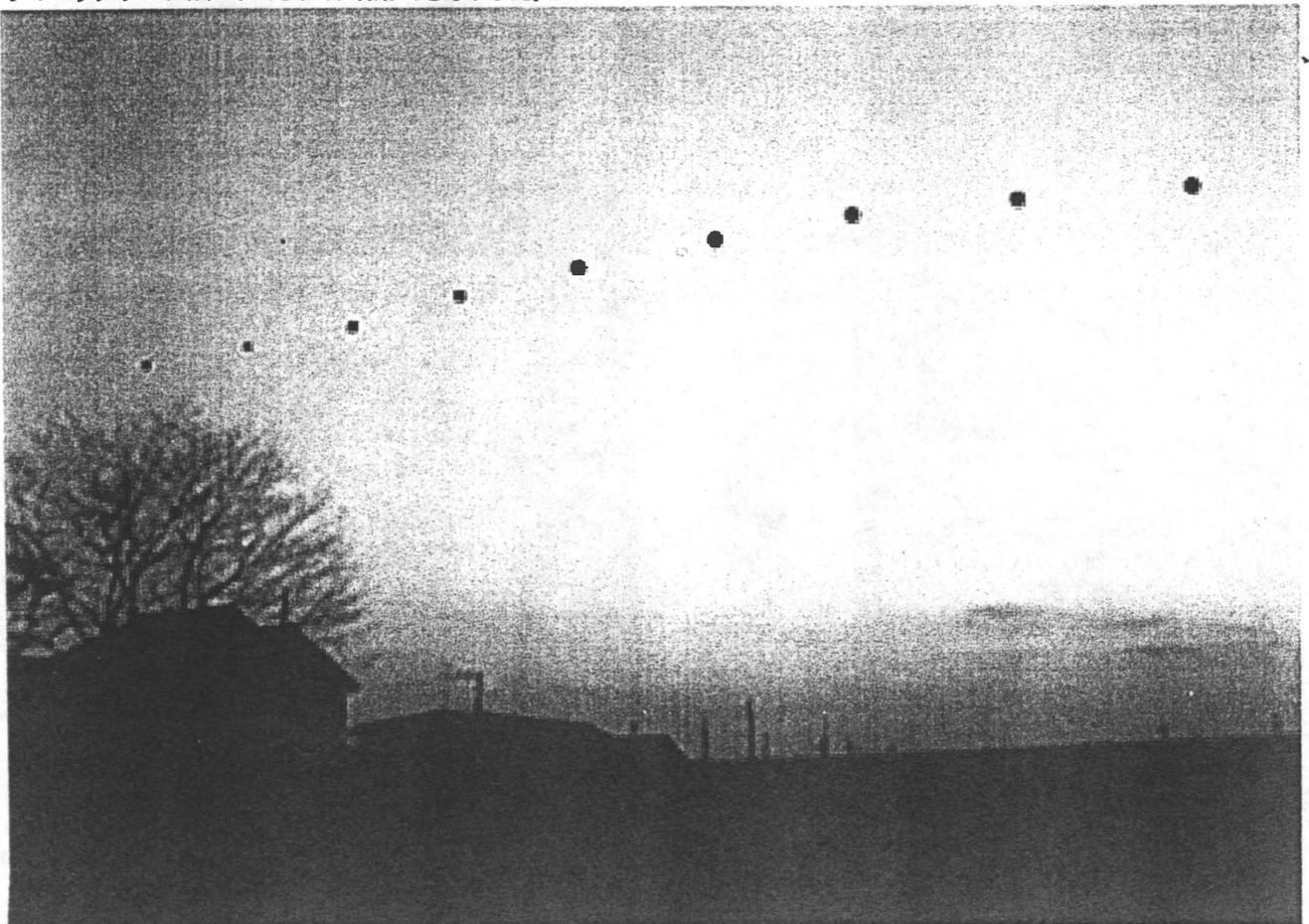
また、彼のホームページによると、様々な不思議な夢を見られている。これも、UFO体験者の特徴と言える。



■ 郡聡氏(2002年6月30日編者撮影)



■2001年1月3日午後5時30分都聡さんご一家4人が北から南に向かう巨大なUFOを目撃した図。カメラにフィルムなくビデオカメラのバッテリーが切れていたため、撮影できなかった。



■2002年1月13日、夕焼けを見ているとボーリングの玉のような黒い物体の直線移動を目撃した図。写真撮影に成功。

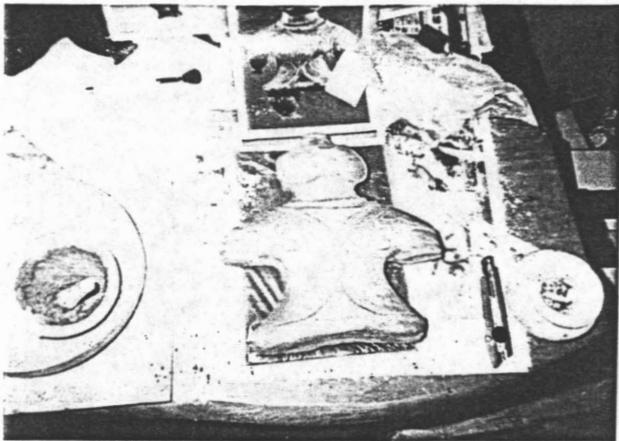
現代によみがえる古代縄文の技術

亀ヶ岡 出土の大型遮光器土偶、復元始まる

精緻な造形と中空で黒く硬い驚異の焼物として知られる青森県木造町亀ヶ岡出土の遮光器土偶は、古代眼鏡の元祖として熱田神宮境内にも祭られている。しかし、今やオーパーツの一つ、「宇宙服土偶」として全世界に知られるようになった。

遮光器土偶出土地に近い五所川原市で旅館を経営する柴谷浩二氏(46才)は、20年以上前より遮光器土偶の製法を研究し、1980年、その成功な小型レプリカの量産を成し

遂げた。その精巧な造形の復元と黒い色艶は、“亀ヶ岡の黒焼き”と知られる姿が現代によみがえった感である。この傑作は、SAKURAの河合浩三氏によって世界各国の首脳に送られた。そしていま、原寸大のレプリカの製作が始まっている。製作者の柴谷氏は、多忙をきわめる旅館経営の合間に、この作業を行っている。その製作工程の写真をご覧いただきたい。



1. 2002年6月20日 型どり 原形



2. 正面型どりセット。石膏を流す。



3. 2.の裏側。正面に石膏を流し、固まった後、回りの粘土を取り除き、裏にも石膏を流す。



4. 裏側の石膏型。くっついてる粘土を取り除く。



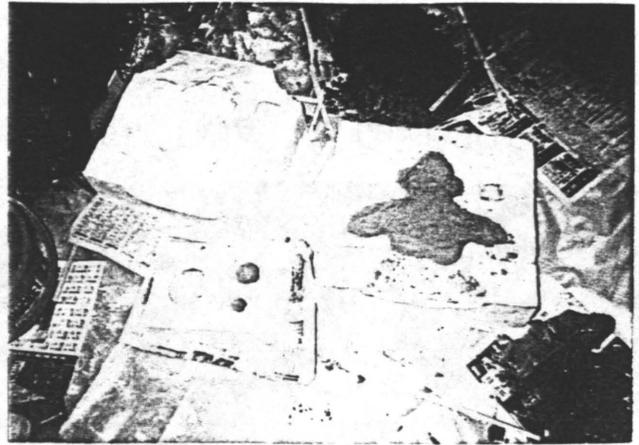
5. 正面の石膏型から粘土を取り除いている。



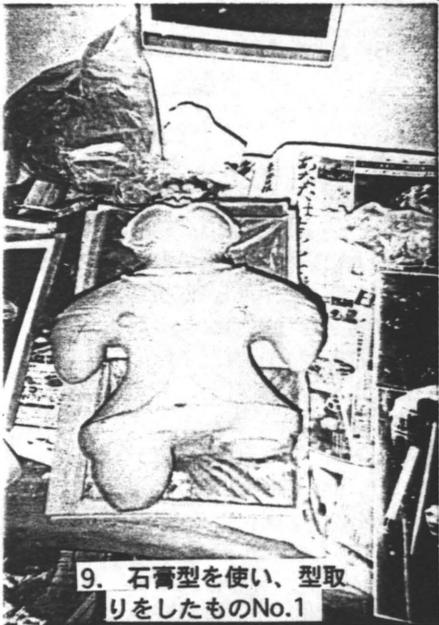
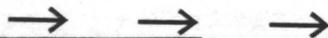
6. 石膏の硬さが十分でないので、慎重に粘土を取る。早く粘土を取り、乾燥にそなえる。裏側。



7. 原型の粘土を慎重に取る。正面



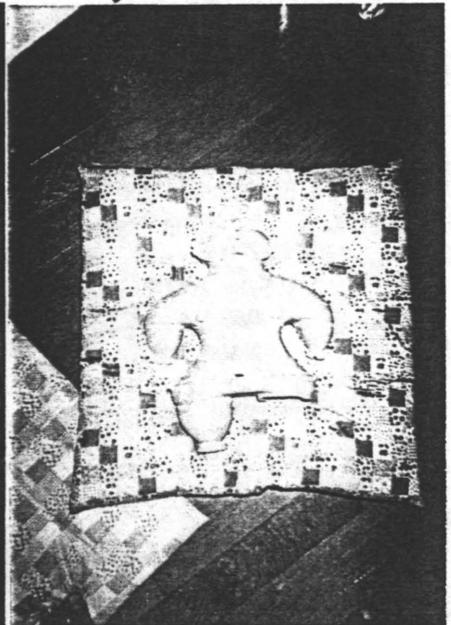
8. 裏側の粘土が取り除かれた型と、粘土が残る正面側の型。正面の方が模様が複雑なため、取れにくい。下の型は手と足の部分。



9. 石膏型を使い、型取りをしたものNo.1



10. No.1に手足、模様を入れ、完成したもの。カンムリが白くなり、乾燥が進んでいる。
2002年7月26日 39cm



11. No.1全体に白くなり乾燥が進んでいる。
2002年8月2日 37cm



12. 完成の試作品を持つ製作者の柴谷浩二氏。最終的には実物大(出土品)の35.5cmを目指していると
の事。



表紙説明:本誌特集号準備の過程で『カミカゼ』という大型写真集で
みつけたもの。1945年(昭和20年)4月14日の太平洋戦争における
沖縄付近の戦闘で、カミカゼの突入を受けた戦艦ニューヨークNEW
YORK BB-34の3番砲塔付近の写真。機体が爆発し、衝撃で水上観
測機がカタパルトから滑り落ちている。楕円形のシルエットは写真
上のミスかとも思われるが、そうならば削除されると思うので、実
際の空に写っている新型飛行機の機影と考えられたのかも知れない。

UFOと『竹内文書』の研究家高坂和導氏急逝

「UFO呼び出し実験」「竹内文書」「宇宙考古学」の活動家



■東京近隣のUFO研究家が集った観測会で目撃記録や参加者を取材する高坂氏。(天宮撮影)



■高坂和導氏の著書の一つ。■北米大陸での高坂氏。

インターネット掲示板『天の浮船』に書き込まれた鹿角UFO研究会代表駒ヶ嶺政也氏の情報によると、高坂和導氏が高血圧性脳内出血で死去し、去る10月20日、東京上野の寛永寺で葬儀が行われたとのこと。また掲示板『アイリネットUFO掲示板』で荒川明子氏による、ユニヴァーサル・フォーラム&空間物理研究会の杉浦氏からの情報として「高坂和導先生、10月16日に出張先で倒られ、17日4時7分にご逝去」との内容であった。

私は妻にもこの掲示板を示しながら高坂氏の悲報を知らせると共に、強い衝撃を受けた。数日は勤務中も彼の死のことばかり考えていた。私なりの供養として、知人より戴いた高坂氏の近著『トンデモ発想で生きてみないか』を会社の休憩時に読みふけた。それと共にいくつかの思い出の断片が浮かんだ。

■1970年頃の思い出

1970年頃、私は若見沢から上京した高坂氏とCBA東京支局の会合で初めて会い、彼のUFO目撃体験、大学の卒論でUFOをテーマにしたこと、そして個人的には6月24日ハヨピラにおけるCBAの式典の出席者について聞いた。私は当時、日陰の身ゆえ、ハヨピラ式典へは参列できなかった。「この式典が非常に重要なこと」は東京の会員の間で話題になっていて、埼玉の支局長が拙宅を訪れて、「式典に使うので荘厳な雰囲気を出すレコードを貸してほしい」との申し出があった。私は彼に、R.シュトラウスの交響詩『ツァラトゥストラはかく語りき』のプロローグ「夜明け」を取り入れた当時のヒット映画『2001年宇宙の旅』など数枚を貸した。式典後、レコードを返却に訪れた支局長から、私の貸したレコードの中から一部式典に使用された旨の話を聞いた。

神奈川サークル長からは6月24日に「天が応えた」とされる「雷鳴」について詳しく説明を受けた。彼は天文気象雑誌の編集者とも親しく、自然現象との識別については、専門的な見識があった。彼は式典の上空で鳴った数度(妻によると6回)の雷鳴は、「くぐもったグルグルという音で、空中放電の雷鳴とは違っていた」ということを力説した。10数年後に生前の蛭沢松雪氏から聞いたところでは「鉄板を落としたような音」と表現したから、その聞こえ方に個人差があったらしい。

当時のCBA東京支局の若手メンバーの間では、勤務・学校を別にしながらも同じ住宅に住んで研究室・拠点としたり、情報管理や個人資料相互活用の理念が検討され、新聞切り抜きを貼る台紙の規格統一から最も良い接着剤の統一まで実行された。各自の所有する書籍のリストが作成されてコピーが回覧され、研究に必要な資料が担当者に供給されるシステムが実行された。また、CBAが機関誌を通じて発表した装飾古墳の文化を自ら再検討するため、2人のメンバーが直接現地を訪れて調査・撮影を行い、その膨大な研究成果がスライドによる公報資料として斬新な解説と音楽で編集され、大学学園祭で発表された。また、それらの成果は支局機関誌『UFOエイジ』創刊号に「よみがえる装飾古墳文化-古代九州宇宙文化圏の探究」としてその第1部が発表された。邦文タイプ経験者の女子メンバーが、3人の書いた原稿をタイプし、執筆者たちがタイプ原紙に図面やイラストを描き込んだ。大勢の若手メンバーが田端と王子の私の印刷工場で印刷し、丁合し、製本した。そのメンバーの中に高坂氏もいた。UFO観測会、公報活動、ストーンサークル測量、学園内活動、深夜や徹夜を含む様々な共同制作作業……まさに我々、UFOを志す熱気に燃えた若者達にとって、この頃は「黄金時代」だったと回想する次第である。

1974年頃だったか、高坂氏がある日、田端の天宮家に来た。我々の組織を離れた彼が、盛んにやっている事に対して、我々は批判的だったが、私にとっても妻にとっても懐かしい旧知との再会であったので、親しく懇談した。それを秘書を通じて松村氏に報告したら「なんで水をぶっかけてやらなかったのか!」と言われた。また天理市に移り住んで杉本町にいたころ、高坂氏から突然電話があった。長い昔話や最近のUFO撮影成果について語り合ったが、私は彼の活動を毒舌で皮肉ったから、敬遠されたようだった。

■「UFO呼び」

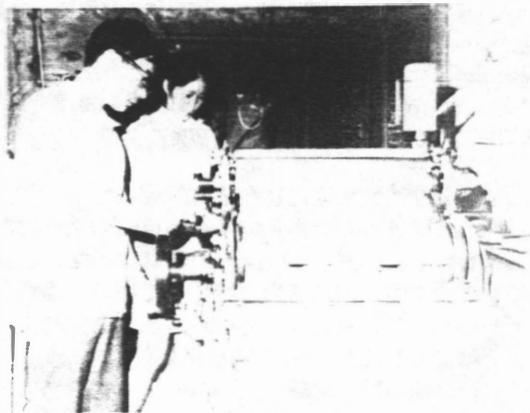
さて、高坂氏に関するエピソードは豊富だが、テレビにおける「UFO呼び」の公開実験は日本列島の隅々まで影響を及ぼしたようだ。なぜなら、この天理市においてさえ「UFOを見た」と人に話すと「天宮さんはUFOを呼ぶ



←CBA東京支局機関誌『UFOエイジ』の製本をする高坂氏。相模原ストンサークル測量での高坂氏→



→天宮印刷王子工場で『UFOエイジ』を印刷中の天宮清。後方は妻ユキ。
←工場で『UFOエイジ』の丁合をするCBA東京支局メンバー。



ことが出来るのか?」という反応がくるからだ。昔、こういう話はわれわれ同好者の間だけの課題だった。しかも「コンタクト派」とされる一部の研究者だけの課題だった。

「UFO呼び」は高坂氏だけではなく、秋山真人氏や、最近では「日本UFO普及調査機構」が行っている。海外のUFO観測風景でも人が輪になって手をつなぎ、昔のCBA支部・サークルにおける観測会風景を思わせるものがある。世界中の国で人々が輪になり、UFOに出現を要請する呼びかけが流行したとしても、悪いことではない。問題はそれらをIFOと識別し、記録し、科学研究の材料としての価値をもたせることにある。双眼鏡も撮影器材も持たない観測なら、個人的な満足を得るだけで済んでしまう。

■ チェルノブイリ原発事故とゼオライト

『トンデモ発想で生きてみないか』の87ページから91ページまでは、高坂氏が1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原発事故に際してとった行動が述べられている。

彼は事故発生を知った数時間後、当時の中曽根康弘首相の秘書に電話した、という。その理由は「1979年の米国スリーマイル島原発事故の時、ゼオライトを使って放射能を吸着されたという技術について首相に伝えてほしい」「近く予定されている東京サミットの議題に“チェルノブイリ原発事故による放射能汚染をいかに防ぐか”のテーマを盛り込んでほしい」と考えたという。

高坂氏は日本で断られた提案をソ連大使館に持ち込み、ソ連科学アカデミーによるゼオライトの実験をとりつけたと、書いてあった。

私はたまたま10月20日に天理市民図書館からチェルノブイリ事故に関する3冊の本を借りていたので、ゼオライトの記述を探すと『ドキュメント チェルノブイリ』175ページに「放射能の中には移動性の高いものがあるとの議

論がある。心配されているのは、主にストロンチウムとヨウ素である。それらは量的には比較的少ないが、きわめて活発な元素であり、土から簡単に離れて有機体の内部に入ってくる。つまりそれらは土中に固定するだけでは十分でなく、化学的に固定しなければならない。石灰、ゼオライト、その他の物質で土壌を処理する必要がある。」と書いてあった。

少なくとも、高坂氏の言う「ゼオライト」が、チェルノブイリ原発事故の事後処理に使用されたことは確かだろう。

拙宅にある百科事典で「ゼオライト」をひくとzeolite→沸石(ふっせき)で、ガス吸着性を利用した廃水処理、土壌改良、悪臭処理など広く使われ、日本は良質の堆積性沸石の産出の豊富な国の一つとなっている。だが、日本の原発事故対策にゼオライトがどの位置に置かれているのかは確認していない。

■ 「竹内文書」

高坂和導氏は徳間書店刊『竹内文書-超古代アメリカに行く』の中で、日本の古代の天皇が「天空浮船」で世界を巡った痕跡を求めてアメリカ大陸に渡り、縄文土器に似た土器や火起し道具、地名、言葉など日本と共通した道具・言語について図解を交えて解説している。

しかし、彼のフィールドワークの出発点となっている「竹内文書」の一般的評価は低く、無数にある偽書の一つとみなされている。たとえば「天皇」という言葉は超古代に属するものではなく、それまで「おおきみ」と呼ばれていた日本の支配者を「天」の思想の影響によって「天皇」と呼ぶようになったのは推古天皇(7世紀はじめ)からである。【中央公論社『日本の歴史-1』P.20】

「天空浮船」という言葉は「天浮橋」「天之御柱」「天の磐船」という記紀の神話用語に類似して、現代のUFOのイメージに最も近い古典的表現であるが、残念ながら正

1957年 ~ 1958年1月16日

ゴラジル海軍省

トリニダゲ島UFO事件の全容



縄文土器の作りか



■CBA東京支局の会合風景。理想に燃えて活発な意見を交していた頃。左端手前が天宮。その後ろが高坂氏。みな20代であった。

右は高坂氏が資料をまとめてガリを切り、自ら謄写版印刷製本したトリニダゲ島UFO事件の全容。

■この一冊でトリニダゲ島UFO事件 ■高坂氏の著書にみられる縄文土器の全容がよくわかる資料。 ■日米原住民の制作を比較した図。

規の神話学からは外れた位置にある。いっぽう、古代日本に活動していた宇宙人の乗り物が、日本を拠点として、中東、南北米へも訪れていた、というテーマは「竹内文書」とは別個に存在している。両者とも「トンデモ思考」の産物として並べられるかも知れないが、古代地球にも現代と同じUFOが飛来してきていたのなら、その行動範囲は「地球を一つの庭」にするほど広いものと推定してもおかしくはない。一人の教師が複数の教室や複数の学校を受け持つのと同じ理屈だ、とはすでに書いた。そうした古代の姿が事実な

ら、何らかの形で痕跡があるかも知れない、と考えるのも「トンデモ思考」には当たらないだろう。問題は現代のUFOも含めて古代UFO飛来の課題を、どう学問的に展開してゆくかである。ここ数年の間に、日本の多くの著名UFO研究家が亡くなった。お一人を除いて編者と親しく懇談した方ばかりである。「ご冥福」という言葉は好きではないが、地球の寿命が永遠なら、早く続きの仕事をしに、どこかに生まれてきてほしいと願うものである。

鹿角UFO研究会の活躍

インターネットの掲示板をはじめとして、地元マスコミにも評判の良い鹿角UFO研究会の活動範囲は多彩である。UFO情報、自然現象情報、航空宇宙天文情報など、幅広い分野の情報収集を行い、それをインターネット、機関誌を通じて発表している。各地の研究者との情報交流も盛んだ。駒ヶ嶺政也代表個人では地元でアマチュア無線を利用した公の役目も兼任している。同会は雑誌『ムー』にも常に民間UFO研究団体として紹介されている。

七 鹿 角 研 究 会

2002年(平成14年)11月22日(金曜日)

鹿角でUFO観測
プロレスラー
サスケさん

古代史や超常現象などにも造形が深いプロレスラーのサ・クレイト・サスケさん(みちのくプロレス代表取締役)が十九日、雑誌のルポライターとして鹿角市を訪れ、地元鹿角UFO研究会と交流したほか、UFOの目撃情報が多い大湯環状列石周辺、マインランド尾去沢でUFO観測を行った。また、ヒラミッド説もある黒又山にも盛り取材した。

サスケさんは、盛岡市の出版社六花舎が発行している季刊誌「ふらう」で、「ミステリアス東北」というコーナーに執筆している。北東北のミステリアスなスポットに足を運び、現場で感じ取ったことなどを記している。

今回の取材では鹿角UFO研の駒ヶ嶺政也代表との対談、怪鳥伝説がある

古代史や超常現象などにも造形が深いプロレスラーのサ・クレイト・サスケさん(みちのくプロレス代表取締役)が十九日、雑誌のルポライターとして鹿角市を訪れ、地元鹿角UFO研究会と交流したほか、UFOの目撃情報が多い大湯環状列石周辺、マインランド尾去沢でUFO観測を行った。また、ヒラミッド説もある黒又山にも盛り取材した。

サスケさんは、盛岡市の出版社六花舎が発行している季刊誌「ふらう」で、「ミステリアス東北」というコーナーに執筆している。北東北のミステリアスなスポットに足を運び、現場で感じ取ったことなどを記している。



大湯環状列石周辺で編集者らとUFO観測するサスケさんを
いる。ただの山ではな
いと、感想
を述べた。
駒ヶ嶺代
表は「その
物体は見て
いないが、
航空機や短
めの飛行機
雲の可能性
もあるが、
鹿角ではそ
れ以外のミステリアスな
ものも目撃されている」と話している。

る旧尾去沢鉾山のマインランド尾去沢、縄文時代後期の遺跡、大湯環状列石周辺、同列石近くの黒又山を訪れた。

大湯環状列石周辺の観測は一時間ほど行われたが、UFOらしい飛行物体は確認できなかった。しかし、黒又山から下山途中の午後四時半ごろに、サスケさんら取材班がUFOらしい物体を目撃したという。

サスケさんはこれまで東京など三カ所でもUFOを目撃している。「黒又山にはオーラがかかって



F-16s Pursue Unknown Craft Over Region

By Steve Vogel

Washington Post Staff Writer

Saturday, July 27, 2002; Page B02

For Renny Rogers, it was strange enough that military jets were flying low over his home in Waldorf in the middle of the night. It was what he thinks he saw when he headed outside to look early yesterday that floored him.

"It was this object, this light-blue object, traveling at a phenomenal rate of speed," Rogers said. "This Air Force jet was right behind it, chasing it, but the object was just leaving him in the dust. I told my neighbor, 'I think those jets are chasing a UFO.' "

Military officials confirm that two F-16 jets from Andrews Air Force Base were scrambled early yesterday after radar detected an unknown aircraft in area airspace. But they scoff at the idea that the jets were chasing a strange and speedy, blue unidentified flying object.

"We had a track of interest, so we sent up some aircraft," said Maj. Douglas Martin, a spokesman for the North American Aerospace Defense Command in Colorado, which has responsibility for defending U.S. airspace. "Everything was fine in the sky, so they returned home."

At the same time, military officials say they do not know just what the jets were chasing, because whatever it was disappeared. "There are any number of scenarios, but we don't know what it was," said Maj. Barry Venable, another spokesman for NORAD.

Radar detected a low, slow-flying aircraft about 1 a.m. yesterday, according to a military official. Controllers were unable to establish radio communication with the unidentified aircraft, and NORAD was notified. When the F-16s carrying air-to-air missiles were launched from Andrews, the unidentified aircraft's track faded from the radar, the military official said, speaking on condition of anonymity.

Pilots with the D.C. Air National Guard's 113th Air Wing, which flew the F-16s from Andrews, reported nothing out of the ordinary, NORAD officials said.

"It was a routine launch," said Lt. Col. Steve Chase, a senior officer with the wing, which keeps pilots and armed jets on 24-hour alert at Andrews to respond to incidents as part of an air defense system protecting Washington after the Sept. 11 terrorist attacks.

Rogers remains convinced that what he saw was not routine. "It looked like a shooting star with no trailing mist," he said. "I've never seen anything like it."
Renny

© 2002 The Washington Post Company
FILER'S FILES #31-2002, MUFON Skywatch Investigations
George A. Filer, Director Mutual UFO Network Eastern
July 31, 2002, Majorstar@aol.com. Webmaster:
Chuck Warren, <http://www.filersfiles-ufo.com>

UFOs BUZZ US EAST COAST: New Jersey UFO maneuvers, Pennsylvania lights, Maryland UFOs captured on video, F-16s launched to protect Washington D.C., New York pilot sees six lights, Maryland jets chase UFO? Virginia base ball size lights, Wisconsin six lights, Missouri pilot spots UFO, California flying triangle, Canadian UFOs, Argentina's mutilations continue, 394 and counting, Russian UFO has search lights and Ukraine reports six blinking lights. UFOs with six lights seen around the world.

NEW JERSEY UFO MANEUVERS

PARAMUS --Three unknown objects maneuver, pulse, then fade out on a clear on July 13, 2002, night over northern New Jersey. At 11:10 PM, two bright lights, which appeared to be stars, were seen moving slowly in formation on a northeast heading. The atmospheric conditions were clear with visibility unlimited. The two objects appeared high up, and were very bright. Within moments of the sighting, a third, less brilliant object, appeared from the northwest sky behind the first two objects, and flew between them. It also appeared to be a star. This third object then changed direction to the north and faded completely. The objects flying in formation then faded completely, and could not be seen. Several moments later one of these a brilliant white light objects pulsed brightly, then faded. Moments later the third object pulsed brightly, then faded as it continued toward the north. None of the objects was seen again, though the first two must have been directly overhead. Observers include a police officer and two security officers. One observer holds a private pilot license all concur that the sighting was not that of a conventional aircraft. Thanks to Peter Davenport NUFORC
FILER'S FILES#31-2002. MUFON Skywatch

PENNSYLVANIA LIGHTS

FORD CITY -- At 9:40 PM, three steady red lights were observed at treetop level on July 20, 2002. My wife and I, along with my mother-in-law, brother-in-law, and sister-in-law observed three non-blinking red lights in a line, two on the left closer than the third. The object was slow moving, appearing and disappearing behind the treeline moving from right to left in the southwest sky. There are significant hills 1000 to 1200 feet in our township. While moving, the lights maintained formation appearing to be on one object about two miles away. While on the phone with local law enforcement, two single engine aircraft were observed flying very high, and their engines could be heard clearly. Thanks to Peter Davenport NUFORC

MARYLAND UFOs OVER BWI AIRPORT VIDEO TAPED

BALTIMORE -- Bill Bean writes, "I met with Virginia MUFON investigator Alexander Zikas and Bill at the observation lot at Baltimore/Washington International Airport on June 22, 2002. I set two camcorders up and began taping, one camera northeast and the other one to the south. We were there approximately 30 minutes when something caught the eye of Mr. Zikas. It was in the northeastern sky and it started forming a shape right before our eyes. It looked like an Alien Being and we began shooting photos and I was taping this as well. After review of the tape and photos, several non-conventional aircraft were captured. Mr. Zikas captured a Silver reflective object and I also captured the same object or a similar one. In my photo I noticed a dark dome on the object. Visit my website and may GOD bless us all." These photos can be viewed at <http://www.ufoman104.com>. Thanks to Bill Bean

Editor's Note: Bill goes out and hunts UFOs, and 'surprise' he finds them. I encourage you to find a good lookout point where you can see a large area of the sky. Get your cameras ready before you go and keep them handy as you drive. Many are reporting they see UFOs shortly after they leave their home and before they get ready at their viewing site. UFOs are being sighted throughout the area.

NEW YORK SIX FIERY LIGHTS START EAST COAST FLAP

SHIRLEY, LONG ISLAND -- A flight instructor at Brookhaven Airport reports sighting six fiery lights flying formation of the southern coast of Long Island. The 21 year old pilot reports, "I was flying an airplane in the vicinity of Shirley, at about 9:30 PM on July 25, 2002, and was taking off for a night flight with a student, when I looked and suddenly there were six bright yellow lights about 8 miles off-shore Smith Point Park, Long Island, directly south of TWA Flight 800 crash. These lights were in a line formation, with 2 closer on the left and the other 4 on the right staggered. I contacted other pilots on the UNICOM frequency, 122.80 MHz, and it was confirmed. One pilot in particular was one of my coworker instructors in another company aircraft. After I started heading northeast bound on course to Rhode Island, I saw the lights disappear IN SEQUENTIAL ORDER from left to right, 6-5...then 4-3-2-1. I contacted the local air traffic controller to see if it could be confirmed on radar. They said yes, and that they did not know at first what it was either, but that it was now off the radar screen and they suspected it was military activity. Now, I am very aware that the area I am describing is known for military firings and that it is the likely answer, but what I do not understand is how these objects were able to hover. Because it was a near full moon, a harvest moon nonetheless, I could clearly tell that they were not boats, and they did not have aircraft lighting. Also, there were no boats in the area that they, if they were some kind of flare, could have been launched from. And they dimmed out in sequence almost perfectly. Thanks to Peter Davenport NUFORC

WASHINGTON DC, NUFORC, FOX, CNN, WTOP, REPORT UFOs

Peter Davenport at the National Reporting Center reports, "We received numerous reports that one or more red/orange changing to blue ovals were seen over Andrews Air Force Base on July 26, 2002." Their existence was first indicated on radio station WTOP because several listeners called in confirming the sighting. NORAD radar spotted a sphere and fighters were scrambled, but they had disappeared. The 113th Air Wing keeps pilots and armed jets on 24-hour alert at Andrews to respond to incidents as part of an air defense system. Fox and MSNBC reported that "Renny Rogers of Waldorf claims, " Just before two in the morning, he saw a large blue ball of light streaking across the sky. But it was the military jets that really startled him. The jets were right on its tail."

TRANSCRIPT OF EVENING FOX NEWS July 26, 2002, follows:

SHEPARD SMITH: The nighttime skies over the nation's capital alive with blue and orange lights streaking across the sky, so say a lot of panicked people who called in to a radio station, no joke here. American fighter jets in hot pursuit... NORAD confirmed to FOX News that two F-16s did scramble, but found nothing! A mystery in the sky above Andrews Air Force Base... that's the one the President uses. Fox reports now from Brian Wilson live in our D.C. newsroom. Brian? BRIAN WILSON: Fair to say, Shepard. A lot more questions than answers at this point, but something strange was going on in the Maryland night sky. Here is what we know; 1:00 a.m. the folks at NORAD saw something they couldn't identify in Maryland airspace, not far from the nation's capitol. The track it was taking caused them some concern so they scrambled two DC Air National Guard jets to check things out. Now, DC Air National Guard confirms that two F-16s from the 113th Wing were vectored to intercept whatever it was that NORAD was worried about.

However, when the pilots got where they were supposed to be, they said they didn't see anything when they arrived on the scene. Now the folks at NORAD would not provide details about the exact location,

direction or speed of the object they were tracking. Now independently, a number of folks who live in Waldorf, Maryland, which is not far from Andrews Air Force Base and not far from the nation's capitol, called local radio station WTOP to say that about the same time, they witnessed a fast moving, bright blue light in the sky. They go on to claim that the light was being chased by military jets. One witness tells the radio station that the jets were right on its tail. Quote: "as the thing would move, a jet was right behind it." end of quote. An investigation is underway. But National Guard spokesman Captain Sheldon Smith says, and this is another quote, "We don't have any information about funny lights. "By the way, this just happens to be the 50th anniversary of a series of still-unexplained sightings over the nation's capitol, a story that made banner-headline news in 1952. Shepard, we'll continue to watch for this. SHEPARD SMITH: And now it can be told. Brian Wilson, live in Washington. Thanks to Kenny Young.

MARYLAND COUPLE HEAR LOUD JETS

WALDORF -- A couple were awakened from dead sleep by a very loud airplane noises that sounded way too close or loud. The couple report, "We thought we were about to be attacked because of 9-11, or we were at war. It was so loud, but then it went away like it was never there and I went back to sleep. I had forgotten all about it until I saw the 10 PM news on Fox 5 and there was a UFO sighting in Waldorf, where we live! They mentioned two F-16 fighter jets being deployed. We must have heard the jets going over our house, or maybe the UFO. Thanks to Peter Davenport NUFORC

TRANSCRIPT OF EVENING FOX NEWS VIRGINIA MEN SEE BASEBALL SIZE LIGHTS

ARLINGTON -- Two witnesses report, "My son and I were in the back yard of our house about 1:15 AM this morning because we had gone outside to get our cat, who was on a ledge outside the second floor window." We were both looking up at the side of the house wondering how long we would have to wait for her to come down, when two circular white lights flew over the house, going more or less west to east or northeast. They were about the size of a baseball held at arm's length. We both saw it and about two minutes later they came back again, from west to east/northeast. This time they both stopped -- don't know how far away -- they seemed close, although the spheres were small? They both stopped for a second, then one of the objects "flew" away at a right angle to its previous path of flight, not up in the sky, but back to the northwest at what seemed to be the same altitude as before. The other object remained motionless for five seconds maybe, then continued northeast on pretty much its original direction. They were definitely two different objects that were flying in tandem at first, then split up. We ran out to the front yard with the video camera, but didn't see anything. They made no noise. If they weren't close they must have been huge. Similar sightings were seen in Waldorf, Maryland about ten miles from us. Thanks to Peter Davenport NUFORC

EDITOR'S NOTE: UFOs were seen from New York to Washington D.C. by multiple witnesses. NORAD was apparently tracking the UFOs on radar and launched two F-16 fighters to intercept, but the fighters were unable to locate the UFOs. The incident appears to be a repeat of the 1952, Washington DC over flights.

FIFTY YEARS AGO LAST WEEKEND: FAA controllers had multiple UFOs on their radars and when these were reported to the Air Force, F-94 interceptors were launched to chase the intruders. Radar Operator Howard Conklin says, "The radar operators knew the UFOs location and track so when they got near, the operators went outside to see the UFO visually as well." The Air Force decided to deny the reports and claimed they were false radar returns caused by temperature inversions. Rumors persist that there was an unannounced loss of one F-94, but this report has never been confirmed. Conklin also revealed the UFOs came back the next night and were tracked sweeping across the Capital, but this time the Air Force was not informed. Once again the UFOs were defeated not by technology, but by obscuratation and denial.

This week's radar track did not look like meteors, satellites, or false radar returns or NORAD would not have launched fighters. Many witnesses for weeks have reported UFOs in the area. NORAD stated that the UFO may have been a small plane that disappeared from radar by landing at a small airfield. Based on the New York sighting earlier in the evening, it is likely that the UFOs were spotted on radar for an extended period and moved toward the Washington DC restricted area. Space Command denies other forms of contact. F-16 pilots at Andrews are on 24 hour alert status. While I was in alert status our requirement was that once we received the order to launch we had to be airborne in a maximum of ten minutes. The pilots would need to be ready near their fueled and armed aircraft. Engine start and taxi to the end of the runway takes a few minutes. It appears the response time was good. It is not surprising that the UFOs could not be tracked. They are exceptionally fast and maneuverable and employ a series of tactics to trick the pilots and radar. I would be happy to provide an intelligence briefing including video to the ANG to help them successfully track the UFOs.

CALIFORNIA UFO ABOVE AIR BASE THE SAME NIGHT

EDWARDS AIR FORCE BASE -- On July 26, 2002, at 3:43 AM, an extremely bright light was seen in sky about 1,000 feet above the base. The light emanated steadily and moved slowly north for about two to three minutes and was followed by two aircraft. The light suddenly blinked out, very close to one of the aircraft. Thanks to Peter Davenport NUFORC

ILLINOIS CROP CIRCLE

NAPERVILLE — Susan Steven's of the Daily Herald Staff Writer reports a crop circle was found on July 18, 2002, next to apartment buildings in a soybean field in a suburb of Chicago. The Naperville farmer called mysterious crop circle 'a malicious prank.' When he stepped out of his truck, the first thing Ed Corrigan noticed was the aroma coming off the Naperville soybean field he came to inspect for bugs and weeds. It smelled shorn, like a freshly cut lawn. Then Corrigan saw the wide paths of broken plants circling out across the field in an unrecognizable, but precise pattern. Corrigan quickly called farmer Steve Berning to describe the damage. A week later, neither man is any closer to finding out who, or what, created the crop circle. "Have you ever heard of anything so crazy?" Berning asked. "Unbelievable." From the air, you can see a series of broken, concentric rings cut into the field off Diehl Road. It loosely resembles other crop circles found in England, where complex designs are found cut into farm fields, often by people who claim the work as artistic achievement. But some crop circle investigators have postulated other causes, including magnetic fields, wind storms and UFO landings.

The Naperville crop circle appeared only two weeks before the release of a big budget feature film on the phenomenon — a fact that has not gone unnoticed. In the thriller "Signs," Mel Gibson plays a farmer who discovers strange circles on his land. In Wiltshire, England, a crop circle that mimics the design in the movie's trailer already has appeared in a field, with the addition of Mickey Mouse ears — a nod to Disney, which is distributing the film. Whether the Naperville crop circle is a similar prank is anyone's guess. William Leone, an investigator with the Mutual UFO Network, said only soil analysis can determine whether the circle was created by humans or some other phenomenon. When he investigated a series of 11 circles in a field of cattails near Argonne National Laboratory in Lemont in 1994, Leone said he found genetic differences in the plants inside and outside the circles, which all measured 84 feet in diameter. "We can't say for certain these circles were laid out by UFOs," Leone said. "Some people link it to UFOs, some don't. I don't know what the explanation for them are. There are so many different theories." Naperville police can't recall any other crop circles, although the city has very little farmland left. There were no tracks. "There's some damage, which upsets me," Berning said. "But I'm more curious than anything. Farmer says 10% of field damaged Thanks to the Daily Herald, 6/18/02 Dailyherald.com

Editor's Note: Barbara Walters will be interviewing Colin Andrews on 20/20 TV Show on Friday evening, August 2, 2002. I hope he will give technical data to prove authenticity of most Crop Circles.

WISCONSIN SIX LIGHTS FLASH OVER UFO DAZE FESTIVAL

DUNDEE — Casey Holt writes, "UFOs made appearances at the UFO Daze Festival to more than 150 witnesses on July 20, 2002, I was there and saw the whole thing and have the lights on video tape. For some reason I felt I should go from here in Minneapolis. The first 6 lights were impressive right away as I saw them come over the Kettle Moraine State Forest like orange plasma balls or ships the color of a campfire. I wondered if it could have been some kind of flares. The movement was more like they were under some power and being guided though. Then some flashed rapidly and really bright like a strobe light and finally went out or dropped too low to see. I called these 6 lights the "Plasma Ships." Then a few minutes later we noticed a bright greenish white light coming rapidly from the south. As it got closer you could see three separate lights that were together. Green on top, white on the bottom and dull red in the middle that was bobbing back and forth between the other two.

I call these kind the "Force Connecting Ships" because they act like they are connected by a force field. I zoomed in my camera and could see the center red light was almost like it was attached to the other two with a rubber band and moving like in a programmed pattern. The way they moved together was really neat. Unfortunately my camera wasn't recording when I thought it was then so I didn't get that on tape. I got a copy from someone else though so you can see it pretty good from their video. As they flew almost right overhead, I knew it must be some kind of weird technology that was doing this. The rain at the time made it less than optimal for the 100 or so viewers their but it was still nice to see these things as they seemed to put on a show for us. What they were I don't know but they were quite something for sure. This Festival has been held for twelve years and UFOs are frequently sighted. Two videos are available. Thanks to Casey Holt and UFO Wisconsin. http://www.ufowisconsin.com/bensons/ufodaze2002_sightings.html

MISSOURI FREIGHT PILOT SEES RAPIDLY MOVING OVAL

KANSAS CITY — I am an air freight pilot that flies smaller, twin-engined aircraft building experience to fly for the major airlines. I saw something strange on my way out of Kansas City International Airport on July 2, 2002. I have always been a skeptic and thought UFO's were bogus, until now. I saw a solid oval, NO blinking lights, or colored lights, moving rapidly across the sky from east to west. I've seen thousands of satellites before and I know for sure this was NOT a satellite. Why? Because this object was about the size of a dime moving across my windscreen. I initially saw it on climb-out as it traveled from directly overhead to slightly above the horizon (about 1 thumbs width with your arm stretched outward) before I lost it in the haze. The object traveled this total distance in less than 3 minutes time. My estimate 250 to 300 miles. It had a soft, medium, white silhouette light which illuminated the entire object. I was climbing out of 4500 feet at the time, and my guess was that the object was in excess of 50,000 feet. I inquired with ATC, to see if I had any potential conflicting traffic, he panned his radar out to include all altitudes, and then he said nothing was on his scope except for "a few low altitude targets that were in bound to K. C. International." The ATC controller and I both laughed a bit over the frequency about it and then nothing was said. It has been at the front of my mind, each day, since I saw the object. Thanks to Peter Davenport Director NUFORC

CALIFORNIA FLYING TRIANGLE WITH TWENTY LIGHTS

HAWTHORNE CITY — A large black flying triangle was sighted on July 22, 2002, traveling along the California coast line at around 10:15 PM. The following night the witness stated, "I walked out onto my patio at 10:21 PM, and saw a string of lights, ran inside my house, grabbed my camcorder, recorded this spectacle for a few seconds. There were about twenty lights all flashing a cherry red color and all of them were flashing heading southeast. They started off in a triangular pattern and started forming a crescent shape. Some objects were further away and not part of the configuration. I was with two friends and we were outside talking. Some red lights approaching from the north (going south) caught our attention. We saw a very huge boomerang or V shaped object, with a bright white light at the "nose," and red blinking lights around its perimeter (maybe four or five on either side of the white light). We were all pretty impressed with its massive size and we kept the object in sight as it traveled along the coastline. We kept sight of it until it was too far away to see. It was totally silent and seemed to glide slowly across the sky. I am totally shocked it did not make the news since it flew right over the LAX flight path.

PALOS VERDES -- A flying triangle was reported coming from the Redondo Beach direction along the coast moving slowly just before 11:00 PM on Tuesday. Thanks, Bill Hamilton Executive Director Skywatch International, Inc. Website: <http://www.skywatch-research.org>

CANADA SIGHTINGS CONTINUE WITH CIGAR AND LIGHTS

HUNTSVILLE, ONTARIO -- Around 1:30 AM, I was at the Cottage Restaurant on July 1, 2002. My group was all out on the patio having a drink, when I looked up to see a shooting star or something traveling at the same speed, but it was two round orange objects heading west. The circles were almost flying formation but then split up and headed upwards in separate directions through the clouds.

TERRACE BRITISH COLUMBIA — Brian Vike reports that a 17 year old science oriented youth called to say, "Although, I always believed there had to be other life out there, I was never truly convinced until two nights ago, when I saw one of the most unbelievable life changing things of my life." It was 12:25 AM, on July 27, 2002, when I saw a moving light in the southwest sky fly towards Prince Rupert at high elevation. As the object began moving further east and higher up but closer I began to realize it was cigar or pancake shaped with a flickering bright light moving around the side. I still wasn't completely convinced until I noticed how eerily alien its maneuvers were. This was not human technology, and was unlike anything I had ever seen before. Two minutes later, it moved from a horizontal position to a diagonal position, but continued to move slowly with a light still running up the side. I was walking home, but the last minute I saw it, it began moving northwest losing altitude and trees obstructed my view. Thanks to Brian Vike (Yogi) Independent UFO Field Investigator/Researcher, HBCC UFO Research Box 1091 Houston, B.C.

ARGENTINA MUTILATIONS AND SIGHTINGS CONTINUE

BUENOS AIRES PROVINCE — The total carcass count to date now stands at 394 according to Christian Quintero, who cautions that many ranchers have stopped reporting new cases, and the tally may in fact exceed four hundred. Most of the cases are in Buenos Aires with 140. La Pampa has 77, Cordoba Province has 27. The bulk of the cases are within 300 miles of Buenos Aires. Thanks to Argentina's Proyecto Condor, the numbers are based on information supplied by C.O.R.

SAN JOSE — A couple that was driving home last night at around 21:00 hours witnessed a large, sky-blue light moving over the lagoon, changing color and size as it did so. Its color was red and it gave off flashes. Minutes later a local resident contacted EL FUERTE [to say that she had seen] the light descend and lose itself behind the treeline. An hour later, at 22:30, two other witnesses saw the same phenomenon.

PARISH — The El Yunque ranch foreman informed EL TIEMPO, he found a bovine presenting signs of mutilation. The case, according to the rural worker's description, is similar to others detected in the area and other parts of the country. In this specific case, the animal showed mutilations in the rectal area, tongue, eyes and jaw. Four mutilated cows were found twelve kilometers southwest of Bartolome de las Casas, having the same characteristics as earlier cases. Thanks to Scott Corrales, Institute of Hispanic Ufology for the Translation (C) 2002. Special thanks to Alicia Rossi.

RUSSIA UFO HAS SEARCH LIGHTS AND PULSATING UFO VIDEO

PERM — Nikolay Subbotin, Director of the Russian UFO Research Station (RUFORS) reports that on July 23, 2002, the "hunting season for UFOs is opened in Perm." After the famous sighting in April, when classic silver saucer-shaped UFO was observed over the Ural region city. On June 29, 2002, around 12:10 AM an UFO was videotaped from the 7th floor of the multi-stored apartment building. Mr. Maksim, who shot the video-footage, said his first impression was "...this might be bright star." But soon he noticed it was moving too fast, so he started shooting. On July 2, 2002, a UFO was observed further south of the original point of observation. It was too fast moving for the star or satellite, and was very bright, pulsating ovoid light. The video shows the moving object pulsating as it moved, making new jerks with every new flash. On July 17, 2002, around 12:30 AM, over the Kama River, several witnesses observed a bright light and flashes inside the low clouds, slowly moving over the river. Suddenly, two beams, like from searchlights, descended and started scanning the river and nearby houses. This stunning sighting lasted for two minutes. Then the beams vanished, light started going away, suddenly it squeezed into little dot and disappeared, the

impression was that the object, emitting light, suddenly zoomed up. Thanks to RUFORS - nikolay.subbotin@psu.ru, <http://ufo.psu.ru>, Translated by Anton Anfalov, Director of Ukrainian UFOlogical Association (UKUFAS)

UKRAINE NEWS FLASH OF UFOs OVER CRIMEA

SIMFEROPOL' -- Anton A. Anfalov reports, that he has received a sighting over Simferopol', the capital of Crimea Autonomous Republic. On July 15, 2002, I got an exited telephone call from my friend Viktor Krupin a former sergeant of the Special KGB, who informed that he, "Just witnessed a UFO at 21.36 hours from his flat, there was bright flash, red in color, to the northwest." He then noticed a shining red object, moving horizontally in zigzag trajectory that disappeared behind the trees after ten seconds. His son saw a UFO in November of 2001, but he did not take this seriously until he got his own sighting.

CRIMEA -- Victor Zdorov was walking his dog near the old center of Simferopol on July 24, 2002, at about 9 PM, when he noticed five to six white lights in line in the northeastern sky. At first, he thought they were planes, but there was no sound and the number and configuration of lights was different from any aircraft. He thought, it might be landing lights for approach to Simferopol, but airport is too far away. While approaching, the lights started blinking periodically not like the constant blinking of commercial aircraft. Six flashes were in an interval of every second. The shape of the object was not discernible but the lights indicated it was a disk-shaped object with white lights on its rim.

SEA OF AZOV -- On Friday, July 26, 2002, at about 10:50 PM, a bright object looking like a white star, brighter than Sirius, was observed over the Crimean peninsula flying northeast to the Sea of Azov. It could be identified as ordinary satellite, but the witness persistently states that it was moving twice as fast as any satellite. Bright white flashes and moving star-like objects were observed almost nightly after 2100 hours on July 24, 25, 26, 27, over the Sea of Azov. There are numerous rumors about an underwater UFO base in the Sea of Azov, and the Black Sea. These include observations of the objects diving into the water. "I am myself the witness of more than ten UFOs during the last five years." Thanks to Anton Anfalov, Research Specialist for MUFON in Ukraine, Coordinator of Ukrainian UFOlogical Association (UKUFAS) an@crimea.com UFO activity over the Crimea has intensified, since 1987.

EDITOR'S NOTE: UFOs with six lights are being reported as activity increases.

NASA's SPACE ENCOUNTERS

Jeff Challender has released the new video "What Is the Truth?". The second video examining NASA and its space encounters with 102 anomalous objects. These events were culled from 1400 hours raw footage of ten live Shuttle flight broadcasts between Oct. 2000 and April 2002. VHS \$25. Send orders to: Jeff Challender 2768 Mendel Way Sacramento, CA 95833-2011

WHAT YOU SHOULD KNOW WHEN HIRING A REAL ESTATE AGENT!

Learn how you can obtain the best real estate agent for your needs. To get a free copy of this report e-mail me at Majorstar@aol.com.

MUFON UFO JOURNAL -- For more detailed monthly investigative reports subscribe to the MUFON JOURNAL. A MUFON membership includes the Journal and costs only \$35.00 per year. To join MUFON or to report a UFO go to <http://www.mufon.com/>. To ask questions contact MUFONHQ@aol.com or HQ@mufon.com. Mention that I recommended you for membership.

Filer's Files is copyrighted 2002 by George A. Filer, all rights reserved. Readers may post the complete files on their Web Sites if they credit the newsletter and its editor by name and list the date of issue that the item appeared. These reports and comments are not necessarily the OFFICIAL MUFON viewpoint. Send your letters to Majorstar@aol.com. Sending mail automatically grants permission for us to publish and use your name. Please state if you wish to keep your name, address, or story confidential. CAUTION, MOST OF THESE ARE INITIAL REPORTS AND REQUIRE FURTHER INVESTIGATION.

Regards,
George Filer

編集後記:本日2003年1月5日の段階で、本誌を建物に例えれば、内装工事を残して、建物の全てが完成した。これから1ページづつ見ながらノンブル、写真説明、装飾に入る。

今回の編集作業は着手してから途中で中断したため、すでに入力してある内容と未着手の分、かねてからの予定が混乱し、タイトルを2度考えたり、最終段階で予定を思い出してその資料を探すなど、余分な時間が取られた。“余暇利用編集”の限界を感じた。四畳半程度の空間に様々な材料を置いているので「あれはどこにいった?」と探す時間も馬鹿にならない。編集は紙1枚・文字1つの世界だ。版下段階でミスに気づき、訂正しようと貼り付けた文字をはがそうとすると破れる。プリンターの電源を入れると例によって低温のために働かない。ストーブで部屋を暖めるが、何度電源を入れてもダメ。仕方なく、iMacに向かい、訂正を入力、プリントする。外は雪も舞い寒く強風である。「ちょっとコピーがしたい」と思ってもひるんで身体がすぐ動かない。しかし、朝食時ふとつけたテレビにイラク攻撃準備や東京三谷のホームレスの人々が映り、なんとか身体を奮い立たせた。編集作業とは、“胸のつかえ”を取り去って楽になるひとときでもある。「いつまでも旗を上げてないで、もう降ろしてもっと楽になってはどうか」と思うとある方の年賀状に『生涯現役』の文字を見て反省した。限られた時間での作業なので、不備の多い点、御容赦のほどを…。

チェコからのクロープサークル写真

提供:FAKTA誌 Milan DOLEZAL氏

■チェコ(Czech republic)のMilan Dolezal 氏とは2000年4月以来、ときおり情報を交換している。彼は1967年生まれの映画スターのような風貌をし、同じ国のJUDr.Jiri KULT氏が、彼から編者の情報を受け取っている、との連絡と多くの資料を載いた。これらのサークルはチェコ国内と思われるが詳細な説明はない。

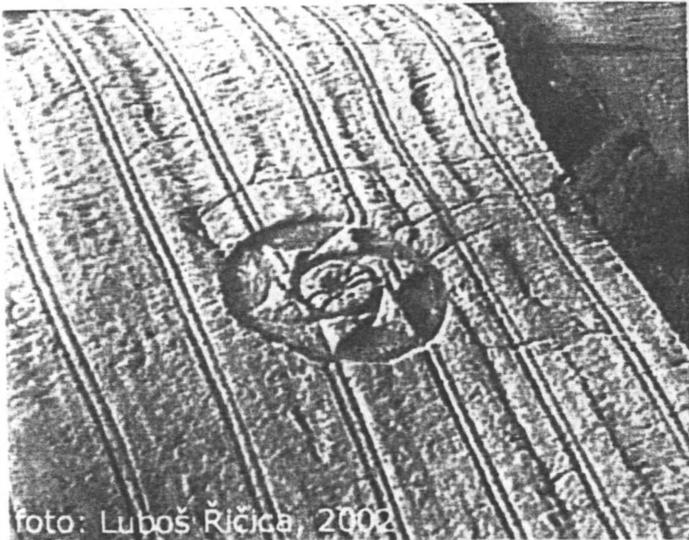


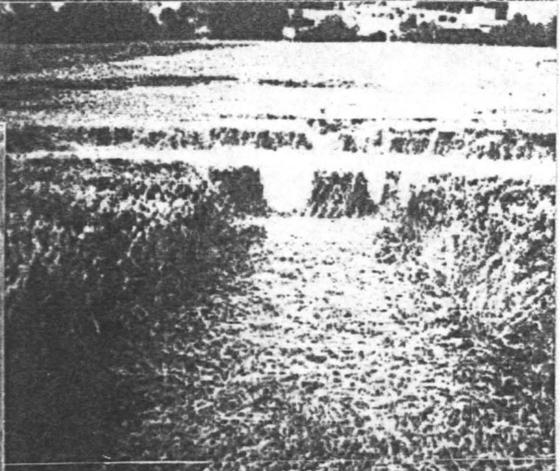
foto: Luboš Říčka, 2002

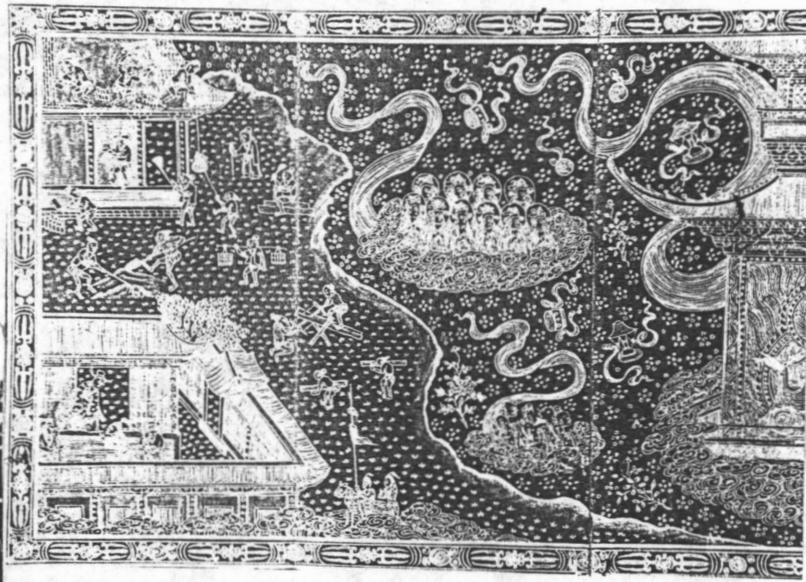


foto: Miroslav Zuzánek



foto: Vlastimil Hela, 2002





宗教画に見る空中の意匠

